
ロセアニア物語

秋山らあれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロセアニア物語

【Nコード】

N0278D

【作者名】

秋山らあれ

【あらすじ】

光り輝く太陽から見捨てられし地、ロセアニア。俗世を離れた美しき薄倅の姉を、慕う弟と憎悪する弟。神秘の能力が呼び起こす悲劇。そして、時代は流れる……。。

人間と魔族は、決して相容れる事は出来ない……………

プロローグ

それは、遠い昔の話。

まだこの大陸に、多くの部族民達が鬩せめぎあっていた頃の事。そして、まだ魔物達が人間を度々脅かしていた頃の事。今ではもう伝説と化し、この地方の伝承として時たま語られるに留まる話である。そう、それは遠い遠い昔の話である。

その遙か昔、大陸の西にはロセアニアという地があった。すでに王国として形成していた。そう、古代ロセアニア王国である。多くの部族をその配下に治めた事で知られる古代ロセアニア王国、その王都は暗海あんかいから駿馬で一日の距離であった。

ロセアニア——こしゅうえ古より、《光り輝く太陽から見捨てられし地》

と呼ばれた。日の神がその姿を滅多に見せない地、それ故ロセアニアの海の色は常に暗く、その為いつしか暗海あんかいと呼ばれる様になったのである。

日の神に忘れ去られたこの海を、魔物達は好んだ。輝かしい光を厭う魔物達は、人間にとって気の遠くなる年月をこの暗海で過ごし、そしてやがて陸へと上がった。その時からである、人間と魔物との戦いが始まったのは……。

魔物が頻繁に人間を脅かしていた時代、人間達もそれに対抗する為の能力ちからを備えていたという。今では、その事実を信ずる者は少ないが……。

そして古代ロセアニア人は、恐るべき魔物を地中へと封じる事を成し遂げた。

1・サラードルとクウィンディラ 1

ロセアニア王には3人の子がいた。嫡出の王子が2人、そして庶出の王女が1人。嫡出子である2人の王子は双子であった。王太子アガダルと弟王子サラードル、それが2人の名であった。

2つ年嵩の庶出の王女クウィンディラは、大陸一の美姫との誉れが高かった。その容もさる事ながら、殊に見事であったのは、その青みを帯びた白銀の髪。そう、遠い昔の彼らの時代にあつてさえも、銀髪は珍しく、尊ばれたのである。だがこの王女は俗世を離れていた、2人の王子達が物心を覚えた頃にはすでに……。

王太子の私室に、案内の者も無視せずかずかと踏み込んで来る者がいた。その様に礼を失して王太子を尋ねる者は2人しかない。父王と弟王子サラードルだ。父王は別として、弟王子のそんな奔放さを、アガダルの従者達が内心快く思っていないであろう事を、この兄王子は知っていた。母である王妃でさえも、王太子である息子をおとなう際は礼を尽くすというのに、あの弟王子は、例え血を分けた兄であるうとも、このロセアニア王太子に対し、あまりに礼を欠いているというのである。だがアガダルは、そんな些細な事をいちいち問題にするつもりなど毛頭無かった。仕来りにうるさい、よそよそしい母よりも、彼はこの奔放で馴れ馴れしい弟王子の方に数倍もの愛情を持っていたのだから。

「やっぱり準備に手間取ってるか。全く、女じゃあるまいし」

サラードルは、鏡の前に立つ兄王子の姿に呆れ顔を見せつつ、寝椅子にどっかりと腰を下ろすと、なかなか長い足を投げ出した。アガダルの着付けを手伝う小姓達が慌てて頭を下げる姿も、てんで眼中には無い様子である。

「別に手間取っているわけでは無いよ。お前がいつも早すぎるだけだ」

そう言つてアガダルは笑った。

「服着て髪撫で付けりゃあ、それで充分だろうに……。俺だつてこれでもものんびり支度して来たんだぜ」

サラードルは肩をすくめてみせた。

「うーむ……」

アガダルは笑顔のまま呻きながら、小姓達が掲げ持つ鏡越しにサラードルをちらと見る。その表情は上機嫌である。

「お前の言う通りだが……うん……そうなんだが……、姉上がお見えになると思うと、ついあれこれ気になってな……」

兄の言葉に、サラードルは鼻に皺を寄せた。

「お前は馬鹿か？ 兄者。あの女は、どんなに兄者が着飾ったつて、そんなの見やしないんだぞ」

「ああ、分かつてるよ、サラ」

それでもアガダルはにこやかに応じる。どうだかな……、サラードルは不機嫌に独りごちた。

「なあ兄者、早くしてやらないとそいつら鏡を落つことすぜ」

えつとばかりに、アガダルが鏡を掲げ持つ小姓達に気付く。2人もすでに手足が震えている様子である。

「おお、すまぬ。下ろして良いぞ、お前達」

その言葉に小姓達はほっとした表情となる。この時代、鏡は大変な貴重品であった。小姓達は、こんなに大きな鏡を———といつても、せいぜいアガダルの頭から胸の辺りまでを写し出す程度の大きさなのだが——— 誤って割ろうものなら、まず命は無いだらうと思ひ込

んでいた。尤も王太子アガダルは、そんな残忍な心根の持ち主では無かった。むしろ穏和であったにもかかわらず、小姓達はそう考えていたのである。当時、鏡がどれ程貴重な代物であったかが分かる。

「なあ、そんなに嬉しいのか？あの女に会えるのが……」

「ああ、嬉しいとも、当たり前だろう」

アガダルは式服の袖口を気にしながら、溜息混じりに答えた。

「惚れてるのか？」

「それに近いな」

「腹違いとはいえ、血が繋がってるんだぞ」

アガダルが明るく笑った。

「知っているよ。案ずるな、サラ。姉上は私にとって理想の女性だっただけさ、それだけだよ、何を考えてるんだ？」

「あの女が理想か？やれやれ、聞き飽きたよ。あんな陰気な女のどこがいいんだか……。あの女と血が繋がってるかと思うと、胸くそ悪くなるね、俺は」

サラードルは憎々しげに言い放った。アガダルはふっと淋し気な瞳で息をついた。

「いくらお前でも、それ以上姉上を貶めると許さないぞ、サラードル」

サラードルは不機嫌な顔を背けぼつりと呟く。

「分かったよ……」

アガダルは知っていた。この弟王子が幸せではなかった事を。様々な物を憎んでいた事を。取り分け、あの神殿の長である美しい姉姫を憎悪していた事を。そして又、サラードルの姉姫を見る時の瞳に、時折ふつと憎しみ以外の色が宿る事も知っていたのである。それ故アガダルは案じていた、この弟王子を……。

「そんな風に座っていると式服が皺になるぞ、サラ」

儀式用の装飾過多な剣を佩き支度を終えた兄王子は、弟王子の肩を

つづいた。

「かまうもんか」

そんな口をききつつも、サラードルは寝椅子から背を起こした。

「ところでお前、素行が悪すぎるぞ、このところ」

小姓達が側から離れたのを見計らって、アガダルは口調を変えた。そして声をひそめる。

「いかがわしい店に出入りしているそうだな？父上と母上の耳に入る前に止めておけ」

サラードルは、鼻を鳴らした。

「あそこの女達は皆可愛いよ、兄者。クウインディラと違って人間味があるからな。それに、皆哀れな女達だ。己を売る以外に、生きる術が無いんだからな」

そう言つて弟王子は立ち上がった。案内の者が呼びに来たからである。兄王子は困惑顔で、仕方無さそうに小さな溜息をついた。

1・サラードルとクウィンディラ 2

今宵は、この双子の王子達の19度目の生誕祝典である。ロセアニア各地から貴族や豪族達が、はたまた周辺の部族達からも惣領達が、この王城へと詰めかけるだろう。そして神殿からは、長である巫女姫が王子達に祝福を与える為に訪れる筈である。

臣民達の前で王子達は、父王と母妃母妃に形だけの挨拶の口上を述べる。サラードルは、こういった公式な場が大嫌いであった。こういった事をにこやかにそつ無くこなす兄王子に、サラードルはいつも半ば呆れ半ば感心した。

まるで水に映したかの様にそっくりな2人。顔立ちだけでは無くすらりと伸びた背丈も、決して太くは無い締った体つきも、姿形だけは何もかもがそっくりな兄弟であった。だがそれにも拘らず、この兄弟の醸し出すそれぞれの雰囲気、何と異なっていた事か。その琥珀色の瞳が語るところの、何と異なっていた事か。如才ないアガダルは、朗らかで良く笑った。そしてサラードルは、兄王子の様に明るく笑う事は無かった。せいぜい皮肉を帯びた笑みを浮かべるのがやつとのところ。いつも褪めた眼で物を見ていた。

臣達は、弟王子の扱いを知らず疎んじた。それは父王と母妃でさえも同様であった。素行不良の、一体何を考えているのか分からない王子。勝れた武人武人のであつたにも拘らず——否、勝れた武人であつたからこそ、この弟王子は余計に疎んじられ、恐れられたのかもしれない。褪めている様でいて、恐ろしい程に荒々しく残酷な一面をも、この王子が持っている事を臣達は知っているのである。人々は裏で王子達をこのように呼ぶ。《光の王子と影の王子》と。

広間が、ほう．．．．．つといった、感嘆の溜息混じりの声で響動めいた。人々が次々に跪き頭を下げてゆく。詩人達が、その口に乗せ唄い称えた程の、見事な銀の髪を腰よりも長く垂らし、純白の聖衣にその細い身を包んだ神々しい巫女姫クウインディラは、数人の巫女を従え、ゆつくりと玉座へ歩を進めていた。

純白のクウインディラ、銀の髪のクウインディラ、神秘の乙女、聖なる乙女、大陸一の美姫。巫女姫を称える、華々しくも美しい形容句がどれ程あつたであろうか。正に、日の神に忘れ去られし暗いロセアニアに射す一筋の光。

王女が神殿へと上がったのは、まだ5歳にも満たない頃であつた。この王女が神殿へと預けられたのは、別にこの姫が妾腹だつたからというわけでは無い。確かに王家の外腹の子女達が神殿に預けられる事は、決して少なくは無い。巫女や神官になり生涯を神殿に暮らす者達もあれば、年頃に成長した頃に還俗し、結婚を許される者もいた。——それはほとんどの場合、政略の道具とされたのだったが、．．．。しかしクウインディラの場合は違つた。王女が生まれたとき、祝福を与えた前の大巫女は、小さなまだ目も開かぬ赤子から、並々ならぬ素質を見て取つた。神秘の能力である。前の大巫女は王に進言した。この王女を神殿に差し出すべきであると、己の後継者として教育されるべきであると、それを拒む事は、罪以外の何物でも無い。

王は拒めなかつた。このロセアニアを守る神殿、殊に長である大巫女の発言力は強い。たとえ王でさえも大巫女の前に跪く。

前の大巫女は、クウインディラが8つの生誕日を迎えた時、神殿に貰い受けるという約束を取り付けた。そうして王女は、王都郊外の瀟洒な屋敷で、王の妾妃であつた母と共に幼少を過ごした。そう、約束の年齢まで、王女はそこで何不自由無く暮らす筈であつた。だが彼女の持つ神秘の能力がその邪魔をした。

手を触れずに物を動かさし、見えぬ筈の物を見た。そう、見えぬ筈なのに、王女には見る事が出来たのだ。一体どうやって……？王女は生まれながらの盲めしいであつたというのに……。理解し難い現象に、王女の母は恐れ戦いた。この母は、己が腹を痛めし娘を恐れ、疎んじたのである。

王は妾妃の訴えに耳を傾け、クウィンディラが5歳になるやという頃、神殿へと送った。

1・サラードルとクウインディラ 3

19度目の生誕の日を祝って、神殿の大巫女である姫君は、白い手を翳して双子の王子達に祝福を与える。兄王子の恍惚とした表情が眼に見えるようだ。聖なる巫女姫の前に跪きながら、サラードルは苦々しくそんな事を考えていた。姉姫の手が祝福の為、彼の琥珀色の頭に触れた時、サラードルは叫びその手を思い切り振り払いたい衝動に駆られた。サラードルは頭を上げた。姉姫の、黒とも見紛う紺碧の瞳が見詰めていた。総てを見透かす様な瞳。そして何も映さない瞳。

彼は、今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。とてつもなく苦しかったのである。

サラードルは、自分に機嫌伺いをしてくる面々を適当にあしらうと、窓辺に寄りかかった。広間の熱気の為、窓は開け放つてある。琥珀色の髪を颯る風が心地良かった。そろそろ抜け出しても平気だろうか・・・などと考えながら広間の様子を見渡すと、父王の座る玉座の傍らに視線を縫い付けられた。

肩に背に、流れる豊かな見事な白銀の髪。白い面は、今微かに微笑みを浮かべている様子である。父の話に時折ゆるりと頷く。あまりに美しく、あまりに人間離れして見えた。姉姫の前には、果実や香草を料った皿が並べられていた。巫女や神官は肉食をしない、それ故であったが、姉姫はそれさえもほとんど口には運んでいない様子であり、せいぜい薄めた果実酒で喉を潤す程度であった。

その姉姫の杯を、兄王子が立ち上がって満たしてやっている。ク

ウィンディラがアガダルへと首をめぐらす。とても盲めくらとは思えない素振りである。アガダルの姉姫を見るうっとりとした表情が見て取れた。

純白の巫女姫が、突然サラードルに目を向け、彼は思わず息を飲んだ。巫女姫の瞳は、じっとサラードルを見詰めた。見える筈は無い。見える筈が無いんだ……。サラードルはそう思いつつも、姉姫の瞳から目をそらす事が出来なかった。

はっと気付くと、アガダルがこちらに歩み寄って来るところであった。サラードルは慌てて視線を窓の外へと逸らした。

「何をしてる？独りで」

アガダルがサラードルの肩をポンと叩いた。

「そろそろ、ずらかろうかと考えていたところだ」

「ずらかつて何処へ行こうって言うんだい？せめて姉上が引き取られるまでここにいろよ、サラ」

サラードルの瞳に憎しみの色が走った。

「冗談は止めてくれ、兄者。もう充分、あの面のせいで胸くそ悪くなってるつてのに」

兄王子は、悲し気な目を弟王子に投げた。そして常々尋ねたかった事を、初めて口に乗せた。

「お前は姉上の何が気に入らないのだ？サラ」

「総てだ……」

押し殺した様な低い声であった。

「あの人形の様なツラが気に食わない。何もかもを見透かしてるかの様な目が気に食わない。あの女を見ると、めちやくちやにしてやりたくなる。大嫌いだ」

弟王子の瞳に宿る激しい憎悪の念に、アガダルは戸惑い大きく息をついた。そして迷う間も無く、一つの疑問を口にした。

「ならばさつき、何故あんな目なにゆえをして姉上を見ていたのだ？」

「！？」

サラードルは兄王子を鋭く睨みつけた。

「お前は時折、あんな目で姉上を見る。私は知っているぞ、サラ」
いたわるかのような口調であったにも拘らず、サラードルは酷く不
機嫌な表情で、アガダルを睨んでいた。

「どんな．．．．どんな目だと言いたいんだ？」

兄王子は答えなかった。

サラードルは、恐ろしいまでの不機嫌さで、その場を去った。ア
ガダルは弟王子を案じた。

1・サリールとクウィンディラ 4

王都の花街、遊郭や賭博場が軒を争う。細い通りのあちらこちらには、明らかに春をひき販ぐを生業とする女達が、挑発的な紅の唇で男達に声をかけていた。春を販ぐ生業は、この世の最古の生業と言われるが、無論この時代にも、たくましく春を販ぐ遊女達は大勢いる。

その一角の、それ程大きくも無い遊郭の扉をくぐった青年を、女達が嬌声を上げて迎えた。

「サリール！今日は来ないかと思ってたのにつ！」

赤い巻き毛の遊女が満面の笑みで、サリールと呼ばれた青年の首に両手を絡み付けた。

「どうしてだ？」

「だって貴方、お貴族様でしょ？今日はお城の王子様方のお祝いの日だから、貴方もきつとそっちに行つてると思ってたのよ」

ああ、それか・・・と言つて、サリールは苦笑した。

「行かなかつたの？王子様達のお誕生会」

左腕に絡み付いていた別の遊女が尋ねる。

「行くには行つたが、あんまりつまんなくてなあ・・・」

「そんなにつまんなかつたの？」

一番年若な遊女が、無邪気な瞳で尋ねる。

「でもお城の祝賀会じゃなあ〜い。ねえ、どんなに豪華だった？」

「豪華？う〜ん、すぐに出て来ちまつたからなあ・・・」

「王子様方は素敵だった？サリール？」

その問いに、サリールは吹き出しそうになつた。

「俺の顔を見るよ」

もあゝつ、と笑いながら、口を尖らせ遊女達がサリーを叩く。

「ああゝ、一度でいいから双子の王子様達を見てみたいなあ」

一人の遊女が己の胸に手をあてて、溜息混じりにうつとりと言えば、他の遊女達も口々に同意する。サリーはやれやれと思う。目の前にいるじゃないかと……。

「ねえ、王子様の髪は何色だった？」

例の年少の遊女が興味津々な瞳で問う。

「あら琥珀色よ、知らないのお前ったら」

「じゃあ瞳は？」

「それも琥珀色よ」

「へえゝ、じゃあサリーと一緒に？」

何とも邪気の無い指摘に、サリーは内心どきりとする。

「琥珀色だったって、色々あるぜ、嬢ちゃん。黄もあれば、茶がかつてんのもあれば、緑がかつてんのもあるだろ」

「でもサリー、普通に琥珀色だったら、あんたの髪みたいな金髪のことだろう？」

年嵩の遊女が腕を組みながら言った。

「ああ、そうなのか？ そういうえば王子達も金髪だった様な気がしないでもないな……。遠目だったから良く分かん」

サリーは適当にごまかすと、マントを脱ぎ遊女の一人に手渡す。あの豪華な式服は無論着替えて来ていた。何せ王家の印が派手に縫い取りされている。あんな物を着て来た日には、いっぺんに彼の身分はばれてしまう。

「ねえサリー、巫女姫様のお姿を見た？」

瞬間彼の瞳を被った影に気付いた遊女はいなかったであろう。

「いや、良く見えなかったよ。人が多かったからな」

「あら、可哀想ゝ！ 大陸一の美姫を見逃したなんてえ」

遊女達は口々にサリーをからかい慰めた。

「なあ女将はおかみどうした？あのうるさい姿が見えないが．．．．」
「ああ、ちよつとそこまで用足しだつてさ。すぐ戻ると思つよ。
酒でも飲むかい？」
「そつだな．．．。サリーが答えると、遊女達は再び嬌声を上げ、彼を奥の部屋へと引つ張つて行つた。」

「やれやれ、しみつたれてるねえ、つたくつ！！」
門を出るとヴァジヤは悪態を吐き始めた。

「この時間に来てつてから、わざわざ来てやつたつてのに、つけの半分しか払いやしないだからっ！こちとら娘達を食わせなきゃならないつてのにさっ！！」
ぶつぶつ言いながら、用心棒の介添で馬の背に乗る。

「でもさあ、ウドや、半分でも取り立てられたんだ。何も無しのよりかは、いいさねえ？」

ヴァジヤは、養子であり用心棒でもあるウドに尋ねる。がたいの良い青年はくるりと面を返すと、その大きな姿からは想像のつかぬかのような、屈託の無い笑みを見せ頷いた。

「そうさねえ、そうさねえ、これだけでも神に感謝せねばねえ」
細かい事を気にしない質のヴァジヤは、さつさと機嫌を直した。そして真つ先に支払いをしてやらなければいけない娘は誰だつたかと思ひめぐらす。あの娘と、あの娘と．．．．、良し残りの金で、たまには娘達に美味いもんを食わしてやるう。栄養を取らせなきゃ、美しいもんも美しくなくなつちまうからね．．．．。そんな事をあれこれ考えているうちに、花街へと戻つて来た。

「女将つ、女将つ！」

無口なウドが、珍しく切迫した声でヴァジヤを呼んだ。何かと、ヴァジヤが前方を見れば、娘が数人の男達に囲まれている。どうやら

娘はその筋の女では無い様である。深々とマントのフードを被ってはいるが、うら若い娘である事は、その体形からは隠しようも無い。娘は余程に度胸が据わっているのか、それとも怯えきってしまったのか、男達に細腕をつかまれ路地に連れ込まれそうになっていたというのに、声一つ上げないでいたのである。

「ウドっ！お行きっつ！！」

大柄童顔の、ヴァジャの用心棒は、ブンっつと音がする程に激しく頷くと、一目散にその娘の救出に走った。ヴァジャは自力で馬の背から降りると―――何せ彼女は、介添なしでは恐ろしくて馬を歩ませる事が出来なかつたのである。―――手綱を引いて、修羅の場へと近付いて行った。3対1の決着は、もうほぼついていた。

「兄さん方、恥を知りなっ！この花街で、こんな素人娘に手を出すなんざねえ！男の風上にも置けないよ」

女ながらドスの利いた啖呵を切つたヴァジャは、地に伏していた娘を立ててやると、その背に庇つた。

「ウドや、それ位にしておやり」

ヴァジャの打つて変わった優しい声に、ウドはにかりと笑い、締め上げていた男からぱつと両腕を離れた。男はどさりと地面に投げ出された。どうやらウドに、足の一本でも折られたのであろう、立ち上がれない様子である。そして他の2人も、地面で呻いている。

「兄さん達、この花街で素人娘に手を出すとどうなるかって、これで分かつたらう？次からは気をお付けよ。このヴァジャ姐さんはお前さん方の顔をよーっく覚えておくよ。今度こんな真似をしてご覧？ん？」

その口調は甘つたるく、優しくつたにも拘らず、ヴァジャの笑顔は決して優しくは無かつた。

「このヴァジャを敵に回すつて事は、この花街全部を敵に回すつて事さ。よーっく覚えておおきよ、兄さん方」

ヴァジャの眼は笑つてはいなかつた。地にのたうつ男達は、ヴァジ

ヤの名を聞いた時点で、己の顔をこの小太りな中年女から隠そうとした。それだけこのヴァジャの名は、この花街では知られた名であったのだ。

ヴァジャは娘の手を引いて、足早にその場を離れた。ウドは馬を引きながら、大人しく従って来る。ある程度離れた処でヴァジャは娘に向き直った。ヴァジャは非常に小柄であったので、娘を見上げる形となった。

「お前さん、一体何処の娘だい？」

娘と向かい合ってみて、娘のその素振りにヴァジャは悟る。この娘は盲めしいだと……。

1 サラードとクウインディラ 5 (前書き)

注・・・ほんの心持ち、残酷表現があります。

1・サリールとクウィンディラ 5

赤毛の娘は、サリーの唇に舌を這わせた。彼は暫しそれを楽しみ、そしてやがて彼女の甘い唇を貪った。娘の首筋に舌を這わせ始めた時、無粋にも部屋の戸を叩く者があった。寝台の上で、可愛い赤毛の娘の胸を、今、正に開けようとしていた青年は舌打ちした。

「誰だ!？」

「あたしだよ!サリー!」

青年は、娘から上体を起こして、戸口へ目を向けた。

「ヴァジャカ．．．、らしくないな、邪魔しに来るなんて」

「したくて邪魔してんじゃないさ。ひよとして、お前さんにお客さんなんじゃないかと思ってね」

「客？」

サリーは眉間に深々と皺を刻んだ。赤毛の娘も渋々と上体を起こすと寝台から下りた。

「誰だ？」

不機嫌な声音を、サリーは隠しもしなかった。どうせ従者の誰かに違いない。

「うら若いお嬢さんだよ」

「．．．．．?」

何だそれは．．?とサリーは訝しむ。

「琥珀色の髪と目をした若者を捜してるって言うからさ、もしやあなたの事かもしれないと思ってね。心当たりはあるかい？」

「無いね!」

即座に答えた。気心の知れた従者は、この店を知ってはいるが、侍

女達は無論知らない筈であるし、ましてや侍女が自分を迎えに、この類いの店に出向いて来るわけが無い。彼のそんな考えをよそに、赤毛の遊女が、たたと戸口へ駆けて戸を開けた。ヴァジャが、おやつという顔で赤毛の遊女を見、遊女はヴァジャの後ろにマントのフードを深々と被った姿を見出した。興味を覚えた彼女は、歩み寄ると不躰にその客人のフードに手をかけた、女将の止める間もなく

「わあ．．．．、きれい．．．．」

溜息混じりの感嘆の声がサリーの耳にも届いた。遊女に手を引かれて現れたその神々しい姿。フードの下には、さらにヴェールを被っていた。それ故、輝く髪は見えなかったものの、その美しい顔立ちまでは隠せなかった。驚きに目を見張る青年に、ヴァジャは声をかける。

「やつぱりお前さんのお客人だね？」

その言葉が合図でもあったかのように、青年の表情が怒りの色に染まった。

「このお嬢さん、一人で絡まれてたんだよ、そこんとこの路地で

」

「一人で？」

とても信じ難かった。赤毛の遊女が、ひゃーと声を上げた。

「全く、素人娘が一人で、しかもこんな時間に花街を歩くなんざ、粹狂にも程があるよ。よーつく教えてやんなよ、そのお嬢さんに」
ヴァジャの口調は、まるで母親のようである。

「悪いが、2人にしてくれないか？」

サリーは美しい客人を見据えたまま言った。いつもはどちらかというと軽薄そうで陽気な青年の、打って変わった表情とその声の質に一抹案じながらも、金払いの良い顧客の望みである、女将は赤毛の遊女の腕を引いて部屋を出た。穩便に頼むよ．．．．その一言を言い残して。

「何しに来た？ここはお美しい姉上の来る様な処じゃ無いと思うがな」

サラードルは、開けた胸元を整えもせず、椅子の背を掴んで逆座りに座り、背もたれに両腕をかけ、目の前の巫女姫に皮肉な言葉を投げかけた。

「独りで来たってのは本当か？」

言ってから、馬鹿な問いだと気付き、サラードルはフツと皮肉な笑みで口元を歪めた。

「まさかな．．．．途中で従者とはぐれでもしたか？だとしたら、今頃大騒ぎだろうな。神殿の大巫女が花街で姿を暗ましたってな」

「いいえ、ここへは独りで参りました」

抑揚の無い声であった。

「嘘をつけ．．．盲のお前がどうやってここまで来たって言うんだ？それとも盲だっ方が詐りか？」

「わたくしは目で物を見ない代わりに、心で物を見ます」

透明感のある、だが決して高くは無い声音、抑揚の無いそれは、巫女の訓練された声であった。その声はサラードルをどうしようもなく苛立てる。

「じゃあお前は今、その心で俺を見てるってわけか？」

クウインディアはゆるりと頷いた。

「よくもあの城を抜け出せたものだ。今日は特に衛兵が多かったつてのに」

「わたくしにとっては、何でもありません。わたくしが城を抜け出した事に気付く者はおりますまい．．．．」

それが《神秘の能力》ってわけか、便利なこった．．．。サラードルはふと視線を横に逸らし息をついた。この女の姿が目障りだったから祝賀会を抜け出して来たというのに．．．．何故．．．．。

「何故．．．？何故、わたくしがここへ来たか．．．ですか？」
サラードルの心の内を読み取ったかの如き問い。彼は再びクウイン
ディラを見上げる。

「そうだ．．．、何故だ？何故、お前がここにいる？」
押し殺した様に声が掠れた。

「貴方の叫び声が聞こえたからです」

「．．．．．何だと？」

サラードルの目が細まった。剣呑な光が散らつく。

「血を吐くかのような貴方の心の叫びが、救いを求める声が、わた
くしの名を呼んだからです、サラードル殿」

その言葉を綴るクウインディラの顔は、鍛えられた巫女の無の表情
であった。

「ふざけるな．．．」

サラードルは、拳が白くなる程に己の手を強く握りしめていた。そ
の事に彼自身、気付いてはいなかったやもしれない。

「ふざけるな．．．」

聞き取れぬ程の小さな呟き。立ち上がり足音も高らかに姉姪に近付
くと、マントの上からその細腕を荒々しく掴む。それでもクウイン
ディラは表情を変えない。サラードルは吐き気を催す程に怒^{いか}つてい
た。怒りを、憎悪を、蔑みを、人間がこれ程の感情をその顔に上せ
る事が出来るのかという程に、多くの負の感情をその琥珀の瞳に宿
していた。

「お前を殺してやりたいよ、クウインディラ」

サラードルの手が巫女姫の白い細首にかかる。

「お前のその顔、その目、その声、その髪、お前が存在するって
だけで、俺は反吐を吐きたくなる。血を分けてるかと思うと、お前
を殺したくなる。お前が大巫女などで無かったら、とつくにその喉^{のど}
頸を掻き切つてやつてるものを．．．」

サラードルは手に力を込めた。それにも拘らず、クウインディラは
もがきも足掻きもしなかった。為されるがまま、ただ苦し気な表情

を垣間見せるのみであった。それが余計にサラードルの怒りを煽る事となった。

サラードルは、巫女姫の細い身体を、そう、その首を掴んだまま乱暴に寝台へと叩き付けた。咳き込み立ち上がるうとするクウインディラの足元を救い上げ、サラードルはこの巫女姫を寝台の上へと放り上げた。頭から被っていたヴェールが肩に落ち、青みを帯びた銀髪がサラードルの目を射た。自らも寝台に躍り上がると、サラードルはクウインディラのおとがいを掴んで上向かせた。

「助けを呼んでみたらどうだ？泣き叫んでみたら？一度で良い、お前の取り乱したところを見てみたいものだ」

クウインディラの顔に、悲しみとも哀れみともつかぬものが浮かんだ。

「貴方の苦しみが、わたくしの心を打ち付ける……………」

総てを吸い込んでしまいそうな紺碧の瞳が、哀し気にサラードルを見詰める。

「だまれ」

「貴方の苦しみが、痛い程にわたくしに伝わる……………」

「だまれっ！」

サラードルの手が、クウインディラの頬を張っていた。

「知った様な事を言うなっ！」

憎々し気な言葉と共に、サラードルはクウインディラの髪を力任せに掴むと、打たれて血の滲んだ彼女の唇を荒々しく塞いだ。

1 サラードルとクウインディラ 6 (前書き)

注 心持、残酷描写あります。

1・サラードルとクウィンディラ 6

その荒々しく激しく長い口付けに、クウィンディラの諸手は抗い、その喉からは苦し気な声が洩れた。．．．．血の味．．．．禁を犯した口付けにはふさわしい．．．．サラードルの心の片隅に、ふとそんな考えが過る。唇を離すと、クウィンディラは白い頬をやや紅潮させて、荒い息をついた。サラードルの手が、クウィンディラのマントの留め金を無造作に外すと、マントとヴェールが共に寝台の上に広がり、彼女の象徴的な純白の聖衣が露になった。

「俺の心がお前に救いを求めた．．．か。だからここ丁寧にも、ここまでのこのことやって来た．．．か」

サラードルは笑う。蔑み、意地の悪い声で．．．。

「ならば救ってもらおうじゃないか、ここは、そういう場所だつ」

サラードルの両手がクウィンディラの聖衣を無惨にも引き裂く。絹を裂く音が、まるで狂気を帯びた女の甲高い悲鳴の様に、不吉に部屋に響いた。

「喚くなら喚くがいい、助けが欲しければ叫べ、泣き叫んでみる、そうしたら許してやってもいい」

その最後通牒にも、クウィンディラはただ無言のまま、哀し気な瞳でサラードルを見上げるばかりであった。クウィンディラを組み敷く彼の瞳に、ふと憎しみとは別の感情が入り混じる。サラードルの手は、巫女姫の露となった胸の膨らみを掴み、舌は彼女の細い首筋を這い、そしてその足を割り、彼は、血族の禁を犯した。

ヴァジャは、何も尋ねなかった。尋ねるまでもなく、何があったかは明白であったからである。彼女は銀髪の娘の白い身体を拭い清めてやり、切れた口元にそつと薬を塗ってやり、破れた衣服を繕い、震える娘に着せてやった。そして、寝台の敷布に紅い染みを認めると、この娘を心から哀れんだ。

ヴァジャは、娘の見事な銀髪と盲た瞳に、彼女の素性を悟った。サリーは一笑に付したのだが、去り際に一言囁いた。口は禍の元だよ、ヴァジャ．．．と。

何と恐れ多い事を．．．。何という恐ろしい罪を．．．。神に仕える巫女を汚す者は、神に詛のろわれる。青年の犯した恐るべき罪に、ヴァジャは戦おのいた。

その頃、東の地から未知の民族がやって来た。ロセアニア王国に従属する部族民達の領域を、侵し始めたとの知らせが届き、遠征軍が組織される事となった。この時代、王国は頻繁に野蛮人達の地へと兵を送っている。部族民の数が多かった分、戦も多かったのである。

サラードルは、ロセアニアを去る格好の口実を見出した。東の地へ。長い遠征になるだろう。そのような地へ、王子自ら足を運ばれずとも．．．と、難色を示す臣達もいた。だが、サラードルは聞き入れなかった。そして実際、勝れた将であったこの王子の希望を阻む者は無かったのである。

「正気の沙汰とは思えぬ。野蛮人の地へ、いつ戻れるとも分からぬ遠征に、進んで出掛けたいなんてな．．．。」
兄王子が淋し気に言った。

「そうか？俺は嬉しくて仕方が無い、兄者、王国から出られると

思うとな．．．。東で思う存分剣を振るえるかと思うと、血が騒いで夜も眠れないくらいだ」

サラードルは暗い笑みを浮かべた。

「無事に戻れよ、サラ」

「俺は、別に戻れなくなっただっていいんだ。いや．．．、戻らない方がいいんだ」

「馬鹿を言え。私が淋しい」

アガダルは、心底淋しいと思った。

「兄者．．．」

サラードルは、笑むのを止め俯いた。

「俺は．．．、ここにいたら．．．又何をしでかすか分からない．．．」

「サラ？」

かろうじて聞き取れる程の弱々しい声は、恐ろしい程の苦悩を秘めていた。これがあの猛々しい弟なのかと、アガダルは少なからず動揺した。又何をしでかすか分からない．．．。彼は弟の言葉を心の内で反芻した。又．．．？アガダルの脳裏に、美しい姉姫の姿が過っていった。不吉な予感がした。

「兄者、俺は、ここにはいられない．．．」

顔を上げた弟の琥珀の瞳に、自虐的な色を認めたアガダルは、恐ろしくて何も尋ねる事が出来なかった。

大神殿は、王都から駿馬で半日程、北西へと向かった暗海沿いに位置していた。民が気軽に祈りを捧げに来る小神殿は、ロセアニアの各地にあつたが、大神殿は唯一つのみ、暗海を望む嶮しい崖の上に聳えている。神殿の長を務めるのは、大体において巫女であった。長い歴史の中、能力ある神官が長を務めた時代も数々あつたが、圧倒的に巫女が長を務めた時代の方が多かった。男性よりも女性の方

が、神秘の能力を集めやすいのだと人々は言う。
神殿は、魔物からこのロセアニアを守っている。殊、地中に眠る
恐るべき魔物を封じた、その封印を守っている。封印はほんの少し
でも綻びが出来ると、代々の大巫女達又は大神官達が、丁寧に、眠
る魔物を揺り起こさない様に、その綻びを繕って来たのである。神
殿無くして王国の存続はありえない。

大神殿を密かにおとなった王子サラードルは、間もなくして、姉
姫である大巫女の私室に通された。日の神の訪れの極端に少ないこ
の地とあって、神殿内部も暗く冷え冷えとしている。吹きすざぶ風
の音と、荒々しい暗海の波の音だけが、決して途絶える事の無い、
不変のものに思えて来る。

クウインディラは、白の聖衣姿で彼を出迎えた。尤も、今身につ
けているのは、先日の儀式用の絹物とは違い、質素な布地で縫われ
たものではあったが……。それでもこの女は、変わらずに神々
しい……。サラードルは思った。あの日、自分に穢された
というのに、何故未だに、これ程までに神々しく見えるのだろう。
。クウインディラを見詰めるサラードルの瞳には、もはや憎し
みは無かった。会うのは、あの日以来であった。

「貴方の心は、今でも血を流しているのですね……。サラード
ル殿」

静かな声であった。巫女として訓練された筈の彼女の声に、悲しみ
の音が混じっていた。

「巫女は……。魔物からこの地を守っているというが……。
。俺にはお前が魔物そのものだった、クウインディラ……。
。」

サラードルの声にも又、悲しみの音が混じっていた。

「いつの頃からだろう……。お前に焦がれた。気が狂うかと
思う程、お前に恋い焦がれた。よりによって神殿の大巫女であるお

前に．．．．、血を分けたお前に．．．．。俺は己の血を憎んだ。父を憎んだ。お前を産んだ女を憎んだ。そして、お前自身を憎んだ。何故お前なにゆえでなけりやならないのか．．．．、激しくお前に焦がれつつも、殺したい程にお前を憎悪した．．．．、苦しかったよ．．．．」

清水の流れる如く、淡々と言葉を紡ぐサラードルの瞳が、雫を落とした。クウインディラはゆっくりとサラードルの方へと歩み寄ると、両手を伸ばし、手探りで彼の頬に触れ、彼の涙をそっと拭った。そして彼女は、彼の頭を優しく抱き寄せた。

「お前を穢してから、俺は憎しみから解放された。気が狂うかと思う程にお前に焦がれたあの感情からも解放された。今はただ、悲しいだけだ．．．．」

クウインディラは、サラードルの琥珀色の髪を撫でていた。ゆっくりと、ゆっくりと。サラードルは、両手をクウインディラの背に回すと、彼女をそっと抱きしめた。

「お前を．．．．愛している．．．．クウインディラ．．．

サラードルの囁きに、クウインディラは答えなかった。ただ盲いた瞳から、涙を一筋零したのみであった。

1・サラードルとクウィンディラ 7

サラードル王子が遠征軍の将として王都を発ってから、どれ程後の事であつただろう……。大神殿のうら若き大巫女が、病の為に臥せつたという報が王城にもたらされた。巫女姫の病は長引き、もうすでに幾つもの月が過ぎ去つていた。その報は、あつという間にロセアニア中に広まり、一向に良い知らせを耳に出来ぬ民達を、日に日に不安に陥れて行く。

アガダル王子は、足しげく姉姫の見舞いに訪れたが、見える事は全く許されなかつた。毎回、世話係の巫女から病状を聞き、見舞いの品を置いて来る事の繰り返しであつた。

何十回目の見舞いの折であつたか、アガダルはある日面会を許された。身体有加減が良くなつた物と、彼は大喜びで姉姫の私室へと足を向けた。

アガダルの姿を認めると、クウィンディラは大義そうに寝椅子から立ち上がった。久方ぶりに会う姉姫は、以前にも増して血の気の無い、真っ白な顔色をしていた。それよりも何よりも、アガダルに言葉を失わせたのは、ほっそりとした姉姫の腹部だけが異様に膨らんでいた様であつた。

「あ……。姉上……」

やつとの思いで、アガダルは声を出す。

「久方ぶりです、アガダル殿」

クウインディラが微かに微笑んだ。何が何だか分からぬまま、アガダルは姉姫の前に跪き、大巫女に対する礼を尽くそうとしたが、クウインディラはそれを止めた。

「わたくしは、もう大巫女では無いのです。ご覧の通りの有様です故」

傍らの老女がクウインディラに手を貸すと、寝椅子に座らせ楽な姿勢を彼女にとらせた。

「王太子様」

クウインディラに次ぐ位にあつた老巫女が口を開く。

「この事は、呉々もご内密に。何人にも、例え国王陛下たれども、申されませぬように、貴方様の姉姫様の名誉の為でござりまする」アガダルは無言で頷いた。老巫女はそれだけ言うと、その場を辞した。

「姉上、一体、誰がこの様な酷い仕打ちを、貴女に．．．？」

アガダルは跪いたまま、姉姫の真つ白な手を取って、辛そうに尋ねた。今にも泣き出しそうな顔であつた。

「わたくしは、酷い仕打ちだとは思っていないのです。恨んでもいないのです。ただ、彼が心に抱える深い哀しみを考えると．．．．．
．．．、わたくしも哀しくなるだけなのです。」

クウインディラのうつすらと笑むその表情に苦しみは無い。その微笑は、あの冷たささえ感じさせる巫女のそれでは無く、むしろ女神のそれであつた。

「姉上．．．、お教え下さい、姉上。誰なのですか？その、お腹の稚ちやの父親は．．．。一体、誰なのですか？」

アガダルの声は、低く震え、そして掠れた。彼には、父親が誰かが分かる様な気がした。だが、そうであつて欲しく無いと、彼は身を切られる思いで願つた。もしも、そうであつたなら．．．、あまりにも罪深い、あまりにも．．．。だが、クウインディラは静かな表情で、残酷な真実を口にした。

「サラードル殿です」

ああっ．．．．．、アガダルは打ちのめされ、がっくりと肩を落とした。

「何という事を．．．、サラ．．．、何という．．．、
、二重ふたえの罪を犯すとは．．．」

巫女を穢した罪。血族の禁を犯した罪。

「どうか、彼を責めないで下さい。彼の心は救いを求めているのです、アガダル殿」

身を引き千切られるかの様な、痛々しい表情で嘆くアガダルの肩にそっと手をのせて、クウインディラは静かに言う。

「この様になったは、総てわたくしの咎、それ故、わたくしの命も、もうそれ程長くは無いのです」

アガダルは息を飲み、姉姫を見上げた。

「貴方に、頼みがあるので、アガダル殿」

「姉上．．．」

「どうか．．．、生まれて来る稚やを後見してやって欲しいのです。貴方以外に頼める人はおりません。わたくしは、此度のお産でこの命を落とすでしょうから」

抑揚の無い声は、まるで人事の様に己の死を語る。

「縁起でも無い事を、姉上。臨月うみつきが近付いて気弱になっておいでなんでしょう？」

アガダルの声には涙が滲んでいた。言葉とは裏腹に、彼には分かっていたからである。巫女は己の死期を悟るという事を。ましてや、その巫女神官の頂点に立つ程の神秘の能力ちからを持つ巫女姫である。誤ろう筈が無い。

「どうか稚を．．．、女子おんなです．．．恐らく」

綻る様な瞳であった。神殿に君臨する大巫女であった姉姫が、そんな顔を見せるなんて．．．。アガダルは姉姫を不憫に思い、涙を

隠す事もせず、ただ数度頷いた。

「ご案じ召されるな、姉上。稚は、必ず私がお守りします。貴女の事も。ですから、どうかお気を強く持って、姉上」

クウィンディラは、何やらほっとしたかのように、ありがとう．．．と、まるで普通の女の様に礼を言った。稚を孕む女は強いものだ．．．。後にアガダルはそう強く思った。

姉姫は、アガダルに告げた通りに、難産の末、儂はかなくなった。生を受けたばかりの赤子を取り残して．．．。

アガダルは、散々嘆き涙を流した後、この敬愛する姉姫の忘れ形見に名を付けた。

フアーリユーラ《光の子》と．．．。

1・サラードルとクウィンディラ 終

1・サラードルとクウィンディラ 7（後書き）

第1章が終わりました。ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございます。

日も滅多に射さないどんよりと曇ったロセアニアの、荒んだ王子の
実の姉への恋慕の情。身を焦がす程の、狂気にも似たその情を認め
る事の出来なかった王子は、姉姫を憎悪する事で己を守ろうとしま
した。ですが、王子の心の叫びを聞き取ってしまった姉姫の神秘の
能力が（ちから）が、結局悲劇を呼び起こします。王子は、姉姫へ
の悲しい想いを胸に王国を去り、そして姉姫は禁忌の子を産み落と
し帰らぬ人となりました。

次章は、禁忌の娘、ファールユーラのお話です。どうぞよろしく
お願いします。

秋山らあれ

2・ファールリユーラ 1（前書き）

サラードル王子が、悲しみの情念を押し隠して王国を去り、巫女
姫クウインディラが産褥の為に憊くなってから、時の女神は、すで
に16もの四季を送り出しました。

禁忌の娘ファールリユーラ、その悲しくも恐ろしき秘密は、アガダ
ル王子独りの胸の奥深くにしまわれ、娘は何一つ不自由無く、大切
に養育されておりました。

2・ファールリユーラ 1

「姫様！姫様！」と、初老の女が叫んでいる。それに続き、小言をまくしたてている声が聞こえて来る。やれやれ……、などと口にながら、声のする方向へと歩を向けるシャドスの顔には、楽しそうな笑みが浮かんでいる。そこそこの広さのある庭の、その端に立つ大木の足元に、声の主を見出したシャドスは声をかけた。

「乳母殿、今日の姫の罪状は一体何ですか？」

「ああ、シャドス卿！何とかして下さりませ。姫様が、姫様が、あつ、あんな処に！」

動揺を隠せずに、乳母はおろおろと大木を見上げた。続いてシャドスもそちらを見上げる。

今は夏、日の神がこのロセアニアを思い出し、その輝かしい姿を惜しげも無く見せる季節。民は喜び、作物は育つ。草木は生い茂り、その緑をより一層濃くする。今日も、日の神はその燃える黄金の姿を民に見せている。だが、彼は又すぐにこのロセアニアを忘れるだろう。ロセアニアの夏は短いのである。

シャドスが、眩しさに目を細めながら見上げると、その大木の以外と高い位置に、ぶらぶらと動く素足が見えた。ほう……。見上げるシャドスの口から、感慨深気な声が洩れた。

「大した物だなあ、とうとうあんな高みにまで登れる様になったのか……、姫は……」

「何を感じておいでです！シャドス殿。落ちたら何としますので！？何とかして下さりませったら！」

丸顔の小柄な乳母は、両手を握りしめながらシャドスを責め立てる。
「そうは仰られてもなあ．．．、姫はご自身で登ってらしたわけだから、やはりご自身で下りて来て頂くしかあるまいよ、乳母殿」
「もうっ！それでも姫様の守役ですかっ！」
はい、一応は．．．。ぽつりと口にし、シャドスはこめかみを指で搔いた。

「あら、シャドス、いたの？」

彼の頭上から、透明感のある朗らかな声が降って来た。

「ご機嫌麗しい様ですね、姫。眺めは如何ですか？」

シャドスは声を張り上げた。

「そうね、なかなか良いわ。貴方も来たら？シャドス」

「おお、それではお言葉に甘えて．．．。」

顔を輝かせながら返しつつ、手頃な枝に手を掛けた処で乳母のものですぐい形相に気付き、守役の青年は、はっと息を飲む。

「あ、いや、そうではなくて．．．、そのく、姫、そろそろ下りていらした方が良いかもしれませんよ。乳母殿の頭の血管が切れそうになってます。頭の血管が切れたら、乳母殿、死にますよ」

「あら、そっ？しょうが無いわね、乳母やは」

「それに姫、今日は陛下がこちらにお越しになるそうですよ」
えっ!?!?．．．と、可愛らしい驚きの声が上がったかと思うと、俄に、ガサガサと枝の擦れる音が起こる。大変、大変．．．などと声が降って来る。シャドスは、にこっと笑って、乳母に片目をつぶって見せた。その時、悲鳴が起きた。

「姫様っ!?!?」

乳母が蒼くなり叫んだ。シャドスも顔色を変える。

「あーあ、やっちゃった。破いちゃったわ、服」

乳母は、大仰な溜息と共に頭を横に振り、シャドスは思わず、小さな笑いを零す。

間もなくして、痩せつぽちな少女が、すくと地面に降り立った。何とも目鼻立ちのはっきりとした美少女である。抜ける様な白い肌は滑らかで瑞々しく、意思の強さを伺わせる瞳は琥珀色。そして注目すべきは見事な髪。日の光を受けて輝く少女の髪は、青みを帯びた銀の色であった。姫君の名は、フアーリユーラといった。

フアーリユーラは、現国王アガダル3世の第一子である。王が、まだ正妃を娶る前の、外腹の王女であった。母はいない。フアーリユーラは母を知らない。ただ身まかったという事だけしか聞かされていないかった。父であるアガダル王は、フアーリユーラの母の事を語りはしない。フアーリユーラが尋ねると、父は決まって悲し気な顔をするので、少女は父の前であまり母の事を口には出せないでいた。そして他には、フアーリユーラの母を知る物はいない。隠しているのか、本当に知らないのか、それはフアーリユーラには、分からない。だが恐らく、周りの人間達は本当に知らないのだろうと、少女の勘は告げている。乳母のレティでさえ、彼女の母を知らないと言っ。

『ある日突然、アガダル様は生まれたばかりと覚しき貴女様を、大切に抱えて王城にお連れになられたのですよ』
以前、乳母はフアーリユーラにそう教えてくれた。当時まだ存命していた前王とその妃は、赤子の母親の素性を厳しく問い質したという。何せフアーリユーラの父は、その後の王となるべき身の上であったのだから、それは当然の事と言えた。

『名も無い村娘です』アガダル王子は悲し気に答えた。『彼女は産褥で命を落としました』彼は赤子を抱えながら、涙を一筋零したという。

赤子は、母親の身分が身分であった事から、郊外の瀟洒な館で、人々の好奇の目から隠される様にして、ひっそりと養育された。そ

の館は、赤子であったファールリユーラが、父アガダルに引き取られて間もなく、長い患いの後に身まかつたという、彼女の伯母であった神殿の前の大巫女が、幼少時代を過ごした館でもあった。

アガダルは、娘を溺愛した。毎週必ず、この娘を訪れた。まるで恋人をおとなうかの様に、上機嫌で……。

ファールリユーラが3つの時、アガダルはロセアニアに隣接する部族の長の娘を正妻として迎えた。そして4人の子を生じた。それでもアガダルは、この娘を忘れる事は決して無かった。前王とその妃つまりはファールリユーラの祖父と祖母も、始めのうちはこの得体の知れぬ孫娘に難色を示していた物の、赤子のあまりの愛らしさに、間もなく考えを改め、王家の一員として受け入れた。殊に祖父は、孫の髪が先立たれた娘と同じ色だと知った時、それは神の慈悲に違いないと信じた。悲しむ我らを哀れんで、神はクウインデイラと同じ髪をこの子に賜われたに違いない……と。

銀髪のファールリユーラは、アガダルの正妃と、その子供達が嫉妬する程に、父と今は亡き祖父に溺愛されたのである。

2・ファールリユーラ 2

大急ぎで湯を使い、身なりを整えたファールリユーラは、そわそわと玄関口をうるついていた。乳母が、念入りに梳くしつた、まっすぐな白銀の髪が、帚星ほうじきの尾の如く、輝きながら少女の背で揺れている。

「まだかしら．．．」

親指を噛みながら、落ち着き無く表を覗く少女の姿に、シャドスは目を細めて微笑した。

「まあ、落ち着きなさいって姫、もう間も無くでしょうから、ほら」

そう言つて彼は人差し指を立てながら、耳を澄ます様な仕草をしてみせた。自然ファールリユーラも、小首を傾げる様にして耳を澄ます。馬の嘶こゝろびきが遠くに聞こえた。ファールリユーラの初々しい顔がぱつとほころび、硝子の如き涼やかな声が、乳母の名を呼んだ。

「はいはい、姫様ただ今．．．、そんな声と共に、乳母も慌てて奥から出て来ると、今一度少女の衣装を正し、見事な髪かみの編み込んだ部分に着けた飾りを確かめた。

王は、一人しか従者を伴つてはいなかった。彼は娘をおとなう時、決して多くの従者を伴う事は無かったのだが、それにしても、今日は一人だけとは．．．．．。余程腕ものぶのたつ武人なのであろうか．．．．．、シャドスは疑問に思うが、しかし、その付き従う従者の顔を定かに確認した時、彼は素直に納得した。

「お父様！」

若々しい動作で馬を下りた金髪の父王の首に、少女はすかさず飛びついた。まだまだ父親の恋しい年頃なのである。傍観している者までも嬉しくさせる様な、心からの笑顔で姫君は父王の首に縋り付いている。

「今日も元気だな、愛し子よ」

王は艶のある声を上げて笑った。

「わたくしはいつだって元気ですわ、お父様」

壮年の父の腕に、自らの細い腕を絡ませながら、ファールリユーラは自慢げに答える。

「確かに、姫様はお元氣過ぎる程にお元氣で在らせられますわ、陛下。今日だって――」

乳母の言葉は、少女のわざとらしい咳払いに遮られた。

「ん？何だ？今日は何をしたのだ？ファールリユーラ」

笑いながら王が尋ねる。

「あら、大した事はしませんでしたわ、お父様、本当よ」

ファールリユーラは、澄ました顔で取り繕おうとする。その様子が、何とも愛らしい。王は、笑いをたたえた瞳を、今にも吹き出しそうな顔の守役へと向けた。

「まあ、確かに、大した事ではございませんよ、陛下。姫はただ、庭の端のあの大木の、天辺近くまで上がっていらしたというだけの事です。でもって、地上へ降りられる際、お召し物を派手に破かれたというだけの事です。ええ、それだけの事です」

「んもつつ、シャドスつ！」

少女は、愛らしい唇を尖らせて、守役を責めた。王は楽しそうに笑い出す。

「何と、何と！そのお転婆ぶりは一体誰に似たのであろうなあ……」

「お前の母は、木に登る様な真似はした事がなかったしなあ……」

王が珍しくファールリユーラの母の事を口にした。その琥珀の瞳は、ふと遠くへと馳せる。

「私に似たというよりは．．．．」
サラードル様でございましょうねえ．．．と、笑いを含んだ声で乳母が言う。

「やはり、あの暴れん坊に似たか．．．」

「叔父上様に？わたくしが？」

フアーリユーラは、きよとんと目を丸くした。

父の双子の弟、サラードル王子。フアーリユーラは、その叔父とは一度しか面識が無かった。8年前、とせまえ前王であった祖父が身罷り、父が新王として立つ為の戴冠の儀の折の事。幼かったフアーリユーラは、心底驚いてしまった。父が2人いると思ってしまうのだ。それに、叔父は父に似ていた。背丈も、体型も、髪の色も、瞳の色も、声さえも．．．．。

叔父は、フアーリユーラを見て、目を細めた。彼はかがんで、幼かったフアーリユーラと目線の高さを同じくすると、彼女の銀色の髪をそつと撫でた。

「見事な髪だな、フアーリユーラよ」

誰もが称える少女の髪を、その叔父も称えた。フアーリユーラは、父と同じ顔をしたその叔父を、一遍に好きになった。

「シャドスよ、今日はお前の弟を連れて来たぞ」

久々に会う弟の姿にとくに気付いていたシャドスは、王の言葉に頭を下げて感謝の意を示した。

シャドスの弟？あの、東の部族民達の、野蛮人達の地へ赴いていたという？フアーリユーラが心の内で問いながら細首を巡らすと、少し離れた処に実直そうな青年が控えめに立っていた。突如、愛らしい少女の琥珀色の視線を浴びた青年は、礼儀正しく頭を下げた。あまり多くの人々に接する機会の無い少女は、新しく現れたこの父王の従者を興味深げに観察し始める。とても落ち着いた様子だが、

シャドスよりも随分年若としわかに見える。兄と同じ黒髪を、兄よりも短く刈っていた。瞳は兄の黒い双眸とは違って蒼かった。そう、ちょうど日の神がその姿を現した、夏の空の色だ……。後に少女に、そんな感想を述べさせる蒼であった。

「確かに似ているわね。でもシャドス、貴方の弟御は、随分お若く見えるわ」

「ファールリユーラは、つんと澄まして感想を述べた。

「仰せの通りです、姫。弟は、私よりも10も年若としわかですからね」
「あらっ、という事は……。などど、ぶつぶつ呟きながらファールリユーラはざつと計算してみる。

「じゃあ、19ね？わたくしより3つ年嵩なだけなのね？」

「はい、姫」

弟の代わりに、シャドスが笑顔で頷く。

「名はオーヴィスと申します、姫」

オーヴィス……。少女は、その名を口の中で転がした。まるで彼の瞳の如き蒼い宝石を連想させる様な名であった。青年は跪き、胸に手を充て、頭うぶを垂れる。

「お目通り適い光栄です、銀の姫君」

それは、貴婦人に対する最高の礼であった。

ファールリユーラは父の腕を離れ、その青年の前に立つと、顎をつんと聳やかしながら片手を差し出した。

「接吻を許すわ」

オーヴィスが顔を上げ、ファールリユーラの瞳を見上げた。彼は微かな微笑みを口元に上せ、少女の華奢な手を恭しく取ると、そっと口付けを落とす。

2・フアーリユーラ 3

フアーリユーラは父が大好きであった。毎週必ず訪れる父を、いつもいつも心待ちにしながら、少女はここまで成長したのである。

フアーリユーラが王城へ上がる事は、今まで殆ど無かった。前王

——つまり彼女の祖父

と、その妃のそれぞれの崩御の折

そして父の戴冠の儀の折位なものであった。父アガダル王は、どういふわけかフアーリユーラを王城へは上げたがらなかった。庶出だからか．．．．、母堂が村娘だったからか．．．．、周辺の者達は憶測する。だがそれにしても、アガダル王はこれまで、最低限の機会しかフアーリユーラを王城へは呼んでいなかった。その回数、幾ら何でも少なすぎる。だがその数える程の機会すらも、王は当時渋ったのである。その事を知る守役シャドスト、乳母レティは、首を傾げた。あれだけ溺愛しながら、否、溺愛するからこそ、王城へ上げたがらないのか．．．．？恐らく王は、溺愛する娘に、いらぬ気苦労をさせたくは無いとお考えなのだろう。又、その美貌の為であろう。あまりに美しい少女な故、王は人目から隠しておきたいとお考えなのである。シャドストとレティはそう考えた。理由がよもや別の点にあるうとは——フアーリユーラが、亡き王姉クウィンディア姫に、生き写しとも言える程に似ていた為だとは、二人は微塵たりとも考え及んではいなかった。姪が伯母に似る事は、多々ある事である。その事故、ことゆえフアーリユーラが間違はなく王家の血を引きし娘である事は、疑いようも無いのである。この二人に取って、その点は公表すべき点でありこそすれ、隠さねばならぬ点であるなどと、どうして考え至る事が出来たであ

ろうか。

「お父様、お父様」

楽しい会話を交わしながらの、父娘水入らずの晚餐であつた。娘が急に、人目を気にするかの態で身を前に乗り出し、囁く様に父を呼んだ。ファーリユーラは無邪気な琥珀の瞳で、父の暖かな琥珀の瞳を見上げている。食事の際、娘はいつも父の左手に座を占めた。本来の儀によれば、長方形の食卓の端と端に、互いに向かい合つて席に着くべきであつたが、アガダル王はこの館でのみ、この娘には大抵の自由を許した。父娘の食事は、大きな食卓の片端に、手を伸ばせば充分に相手に届く距離に座を占め、様々な話に花を咲かせながら、ゆつくりと楽しむのが常であつた。

「ねえお父様、シャドス卿の弟御のオーヴィス卿は、東の野蛮人達の地へとお出でだったのでしょうか？」

「ああ、此の程戻つたばかりだ」

父王は手ずから、愛娘の為に焙り肉を切り、皿へと取り分けてやりながら答えた。

「オーヴィス卿は、わたくしより三歳みとせしか年嵩でらっしゃらないのに、一体幾つの時分にあちらへ赴かれたのですか？」

興味津々の態の娘に、父王は低い笑い声を立てた。

「娘よ、今のお前位の頃だよ」

まあ！……ファーリユーラは心底驚き、感嘆の声を上げた。驚いたか？……父王の問いに、ファーリユーラは瞳を見開いて頷いた。

「わたくしは、今、東へ行けと命じられても、恐ろしくて行けませぬ……」

父王は、そんな娘が愛しく、目を細めた。

「あれは武人もののふの家系故な……。シャドスも嘗て、東の地へ行きたがっていたものだ」

「シャドスも？」

「ファイリユーラには初耳であった。」

「お前が生まれたか、生まれぬかの頃だ。あれがまだ、私の小姓であつた頃、私に直願じきがんまでして来た事があつたのだ」

「お許しにならなかつたのですか？お父様？」

「父王は溜息混じりの微笑を娘へと向けた。」

「シャドスは嫡嗣であつた故な……。あれらの亡き父が、私の守役であつた事は知つておるう？ファイリユーラよ」

娘は即座に頷く。

「私がシャドスを、サラードルに——お前の叔父に託したならば、恐らく前王はお許しになつたであろう。だが、あれの亡き父の事を考えると、私にはそれが出来なかつたのだ。何せ彼は、その時すでに息子を一人——シャドスとオーヴィスの兄だ——、その長男を遠征で亡くしていたのでな」

「まあ……。そうでしたの……。」

ファイリユーラの守役であるシャドスが、名門エディンヴァル家の督を継いだのは二年前ふたとせ。このエディンヴァル家の当主は未だ独り身である為、彼の跡目を継ぐ者は、今の処弟のオーヴィスしかない。それ故、オーヴィスは国元に呼び戻されたのだそうであつた。

ファイリユーラは翌朝も、朝餉の前の散歩を楽しんでいた。少女は、よく独りで庭を散策する。人の手により美しく整えられた庭園よりもむしろ、彼女は木々の立ち並ぶ辺りを好んで歩いた。ファイリユーラが館の敷地内にいる限りは、乳母もシャドスも咎めはしなかつた。

爽やかな風の娘達が、ファイリユーラの頬を撫でて行つた。この

館の中では、乳母とシャドスだけが、白銀のファールリユーラの不可思議な一面を知っていた。

不可思議

神秘の能力

ロセアニア王家には、神秘の能力を持つ者がごくたまに生まれる。殊、ファールリユーラの伯母であった亡きクウインディラ姫は、大神殿の大巫女を務めた程の能力の持ち主であったという。その巫女姫クウインディラと同じ青みを帯びし銀の髪を頂き、その容姿を受け継いだ姫は、伯母同様、神秘の恵みを与えられた少女であった。だがしかし、父王は娘に、人前でその能力を振るう事を禁じた。王は何よりも愛しい娘を、神殿に渡したく無かったのである。無論神殿側は、ファールリユーラが生まれた時から、彼女のその能力を知っている。現大巫女は、乳飲み子であったファールリユーラを前に、当時はまだ王太子であったアガダルに執拗に迫った。この赤子は、近い将来神殿に差し出されるべきであると……。

アガダルは頑として頷かなかった。誰もが——王でさえも額衝く神殿の大巫女に、アガダルはこの時、真つ向から反撥したのであった。だが、神殿側にとっても相手は王族、しかも王太子ともなれば、権力行使へと及ぶのも憚られ、現在に至っているのである。そんな状態であった為、万が一ファールリユーラの神秘の能力が、世間に知れ渡ろう物ならば、アガダルも、これ以上神殿側の要請を拒む事が出来なくなるであろう。そして神殿側は、当然圧力をかけて来る筈である。

ファールリユーラは、朝靄の中をぶらりと歩く、精霊達の声に時折耳を傾けながら……。父王は、ここでは寝坊である事が常であった。王城での父が、常に公務のため多忙である事を、ファールリユーラは聞き知っていた。この館を訪れてお出での時くらいは、ゆつくりと時を過ごして頂こう……。それが娘の父への思いや

りであった。

今朝は、やけに風の娘達がちよっかいを出して来る。その度にフアーリユーラは、銀の絹糸の様な髪を手で押さえる。

“こつちに来て、フアーリユーラ”

“こつちに来て、フアーリユーラ”

悪戯好きな風の精霊達が、普段にも増して彼女の髪に絡み付き、それを乱す。

「んもう！何だというの、貴女達？今朝はやけにしつこいのね」

“だって……、うふふふふつ”

“いいから来て、ふふふつ”

風の娘達の、何かを含んだかのような笑い声に、フアーリユーラは苦笑しつつも、誘われるがままに歩を進める。精霊達は、彼女に害をなす事は無い。フアーリユーラはそれを知っていたからであった。

2・フアーリユーラ 4

何やら、堅い棒切れを叩き付ける様な音が聞こえて来た。

“こつちよ、フアーリユーラ”

“こつち、こつち”

風の娘達の奨めるまま、フアーリユーラが植え込みの向こうを覗き見ると、黒髪の青年が二人、剣を合わせている姿が目に入った。棒切れを叩き付けたかの様な音は、稽古用の木剣が合わさる音であったのだ。青年達の腕は、互角な様である。フアーリユーラは、彼らの華麗とも言える剣技に思わず魅入った。殊に、その片方の年若い青年に……。

風の娘達の、盛んに囁し立てるそのからかいの声も、もはやフアーリユーラの耳には届いていなかった。彼らの木剣はやがて、交差したまま力技へと入ってゆく。どれ程の間その状態が続いたであろうか……。やがて二人の青年は楽し気に音を上げ、肩の力を抜くと、木剣を下ろした。

「やれやれ、腕を上げたものだな、オーヴィスよ。とうとうお前を負かす事が適わなくなった」

言葉とは裏腹に、シャドスは楽しそうに笑った。

「信じられないな。兄上に負けなかったのは、これが初めてだ！」
弟の方は、その蒼の瞳を輝かせ、やや昂奮気味に叫んだ。目の前の兄と互角に剣を合わせられた事が、余程に嬉しかったのであろう。

シャドスはそんな弟を前に、軽く溜息を吐きつつ頭を横に振る。

「全くやれやれだ。その内、私はお前に敵わなくなるんだろつなあ……」

「兄上がですか？まさか……、そうなりたいとは願っていませんけど……」

と、その時、シャドスが植え込みの影に隠れる様にして立っていたファールリユーラの姿に気付く、おやっ……？という声を上げた。

「お早うございます、姫。いつからそちらに？」

オーヴィスもそちらへ目を向けると、俄に表情を改めた。そして胸に手をあて、礼儀正しく頭を下げた。

「シャドスと互角だなんて……、オーヴィス卿は、すごいね」

彼らの挨拶にも答えずに、ファールリユーラは思わず己の気持ちを口にしていった。何せシャドスの剣の腕前は、王国では知らぬ者は無いと言われている。王都の片隅でひっそりと育てられているファールリユーラでさえ、知る処なのである。ファールリユーラの異腹の弟、つまりは父王の正妃の長男に付けられた守り役達でさえ、シャドス程の腕を持つ者はいなかった。それが正妃の、ファールリユーラに対する嫉妬の理由の一つでもあったが、アガダル王は、妃の不満をてんで聞き入れはしなかった。長男には幾人もの守役を付けているが、ファールリユーラにはシャドス唯一人である。それが王の答えであった。

「姫、今のお言葉、何やら私はお褒めに与った様な気が致しましたが」

シャドスが、やや戯けてみせた。

「あら、そうよ。褒めたのよ、シャドス。だって貴方は王国一の剣士でしょっ？」

おやおや……、シャドスは、わざとらしく目を丸くした。

「それは褒め過ぎですよ、姫。お褒めに与って、嬉しい事は嬉し

いですが……」

「だって、お父様がそう仰ったもの」
「ファーリユーラは、やや首を傾げて言い張る。」

「お言葉ですが、私は到底、姫の叔父君には敵いませんよ」
なあ、オーヴィス？……姫君の守役は、弟に瞳で問いかける。

「あら叔父上様がお強いのは、私だって知ってるわ。でも叔父上様は、王国を離れられて久しいじゃないの」

「ファーリユーラはシャドスの剣の腕を、盲目的に信じ込んでいるのである。」

「でも、さすがはシャドスの弟御ね。勝てはしなくとも、シャドスに負けもしないだなんて……」

少女に称讃され、オーヴィスは少し照れた様な表情で微笑んだ。

「それも時間の問題ですよ、姫」
えっ？……と、ファーリユーラがシャドスを見上げる。

「恐らく、私は近々この弟に敵わなくなりましょうよ……」
「兄上……」

まあ……、少女は唇に細い指をあてて、守役の弟の、中々に整った顔を見上げた。

レティがファーリユーラの名を呼んでいた。

「ああ、姫様ひいさま！そちらにお出ででしたか。陛下がお目覚めになられましたよ！朝餉を共になさりたいのでしょうか？姫様ひいさま！」

丸っこい乳母が、向こうの方で叫んでいる。ファーリユーラの表情が、ぱつと華やかな笑顔に変わった。

「お寝坊のお父様のお目覚めだわ！じゃあね、二人とも」
そう言い残すや、少女は青みを帯びた銀の長い髪を揺らして、子鹿の様に駆け去った。

シャドスが、慌ただしく走り去る姫君の背を見送りつつ低い笑い声を立てた。

「やれやれ、姫は一体何時になったら父離れなさるのやら……」

「.
その声が耳に入らぬかの態で、オーヴィスは姫君の背を見送り続けている。まるで眩しい何かに向ける様な瞳をして。

「おいっ、オーヴィス」

兄に二度小突かれて、オーヴィスは我に帰った。

「ああ、兄上。何と愛らしい姫君でしょうか、ファールユーラ姫は.....」

「まあな、姫は実に愛らしい.....が.....、お前、間違っても惚れるなよ」

シャドスは真面目な表情で、年若い弟に釘をさした。

「まさか、兄上、からかわないで下さい」

オーヴィスは、一笑に付した。

2・ファールリユーラ 5

オーヴィス・エドワル・デ・ラ・エディンヴァル
名門エディンヴァル家の当主の弟、そして今の処、国家が認めるエ
ディンヴァルの家督の一番目の承継者であった。

東の地より呼び戻されて後、オーヴィスは、その剣の腕を買われ
て現王の守役を務めた。それ故、青年は国王の赴く処、何処へなり
とも同行した。王の側仕え．．．、そんな名誉な職があるうか．
．．．？ エディンヴァル当主である彼の兄は喜び、彼の一族は喜
び、そして彼自身、その名誉を喜んだ。そして．．．、そし
て青年は、王が毎週おとなう、美しくも愛らしい王女に心を奪われ
ずにはいられなかったのである。そう、白銀のファールリユーラに．
．．．。そう．．．、少女の恋する瞳に出逢ってから、どう
して彼が彼女に恋せずにはいられたであろうか．．．？

“ファールリユーラが恋をしているわ”

“ファールリユーラが恋をしている”

早朝の朝靄の中である。おしゃべりな風の娘達は、今朝もやはり
目敏くファールリユーラの姿を見付けて、からかいの言葉をかけて来
た。

“あの人のせいで眠れなかったのね？”

“うふふっ、あの蒼い瞳の若者のせいだって．．．”

「もう．．．皆、あっちへ行つて！　うるさいわ」

“うふふふっ．．．．．”

“ふふふっ．．．．．”

“ファールリユーラ！”

“ねえ、ファールリユーラってば．．．．．”

「何なの？　からかつのは、もう止めて頂戴！

“彼が来るわ！”

“あの若者が来るわ！”

「えっ!?!」

その時だった。木立の影から長身の黒髪の、そして蒼い瞳の年若い青年が現れたのは．．．．。

姫．．．．。青年の唇が動いたが、その声はファールリユーラの耳にまでは届かなかった。一瞬の後に青年は微笑み、そして右手を胸に礼儀正しく頭を下げた。少女の胸は高鳴った。

「随分お早いね、オーヴィス卿」

ファールリユーラの澄ました口調を、彼女の耳元で風の娘達が囁き立てる。

「姫君も、お早いのですね。もう冬將軍もそこまで訪れていると
いうのに」

青年の声は優しい。本当に武人ものふなのであろうか．．．．。ファールリユーラは幾度か考えた。

「でも、今朝は暖かいわ。それに日の神様がお出でになりそうな

空模様だわ．．．．」

「そうですね」

青年は、穏やかな笑顔のまま空を仰ぎ、フアーリユーラに同意した。

この青年が父王と共にこの館を訪れるのは、これで一体幾度目だろう．．．．？ フアーリユーラは、ふと考える。もう両手の指の数ではとても足りぬ程である事だけは確かである。それなのに．．．．こうしてこの青年と二人きりで言葉を交わすのは、これまで一体幾度あったであろう．．．．？ 片手の指でも余ってしまう程の回数しか無かった。

二人は何となく共に歩を進め、そしていつの間にか庭の端の、あの大木の元まで来てしまっていた。

「ねえ、オーヴィス卿」

「はい、姫」

「貴方は、木登りが出来て？」

フアーリユーラが彼を振り返り、唐突に尋ねた。

「はい、一応は」

青年が神妙な面持ちで答えると、少女は実に嬉しそうな笑顔を見せた。

「じゃあ、登りましょう！」

そう言うや、姫君は大木へと駆け寄って飛びつき、するすると登って行った。途中、あっけに取られていたオーヴィスを呼び、後はそのままさつさと上へ行ってしまった。

「大したものだな．．．．」

オーヴィスは独り言を呟くと、笑いつつ姫君を追って、あつという間に木の上の人となった。

館は高台に建っていた。そして庭の端に立つその大木の上は、実に見晴らしが良い。

「成程．．．．、これは良い場所ですね。日が出れば王城ま

でもが良く見えるのでしょうね、姫」

「ええ、そうなの。私は、ここからの眺めが好き」

ファアリューラの琥珀色の瞳は、遠くにうつすらと浮かぶ、物々しい王城を見詰める。

「お父様が恋しいときは、ここからお城を眺めるの・・・」

そう口にしてから、ファアリューラははっとしたかの態で、一段下の枝に足場を固めていたオーヴィスを振り仰いだ。何かを恥じらうかの様な表情であった。

「姫君？」

どうされました？・・・オーヴィスの蒼い瞳が尋ねる。

「恥ずかしい・・・。子供みたいな事言っちゃったわ・・・」

姫君は俯いた。

「お父君を恋しく想われる事がですか？」

ファアリューラは極り悪そうに、上目遣いにオーヴィスを見上げる。

「笑わないのね・・・」

「まさか・・・、お父上を恋しく想う事が、子供じみているとは私は思いませんが」

青年の優しい表情に、ファアリューラは顔を上げる。

「そう？」

青年が頷くと、ファアリューラは何やら嬉しくなり微笑んだ。その時であった。雲間から太陽が姿を現した。夏も過ぎしこの時期には、珍しい事である。王城の向こう側から登った日の神は、城下の街並を照らして行く。贅沢な眺めだと、オーヴィスは思った。

「この眺めを覚えてくれたのは、シャドスなの」

ファアリューラの腰掛ける枝よりも一段低い枝の上に立っていたオーヴィスは、それでも目線が彼女よりも高い位置にあった。そのオーヴィスを見上げてファアリューラは話す。

「つまりは．．．、貴女に木登りの手解きを差し上げたのも我が兄という事ですか？ 姫」

「ええ、そうよ」

オーヴィスは、くすつと笑い声を洩らした。

「あ．．．、今のは秘密よ。誰にも言ってはダメよ、オーヴィス卿！ シャドスとの約束なの」

瞳を大きくして、慌てて言い添えるファールリユーラが可愛らしくて、オーヴィスの顔一杯に笑みが広がる。

「仰せのままに、姫君」

少女の心に染み入る、優しい声音こわねであった。

「久々の天気だな、シャドスよ」

庭園の植え込みの間を歩きつつ、国王は空を見上げた。

「（おし）実に、陛下。ファールリユーラ様も今頃は、大喜びで木の上の人となっておられるでしょう」

王の共をするシャドスが、そんな事を言う。

「やれやれ、何時までたっても於転婆者だな、あれは」

王は苦笑する。

「それにしても、朝の散歩は気持ちの良いものだな。成程、あれが好むのも分かる」

そう言つて王は立ち止まると、秋の朝の清々（すがすが）しく冷えた空気を胸一杯に吸い込んだ。

「おや、姫君のおもどりです、陛下」

向こうからやって来るファールリユーラに逸早くいちはや気付いたシャドスは、彼女の後ろから歩んで来る青年に気付いて、もう一度、おや？ と、呟いた。王は二人の姿に、ただ興味深気な笑みを浮かべたのみであった。

「お父様！今朝はお早いですのね」

父王の姿を見付けると、ファールリユーラはまるで子犬の如く、嬉しそつに駆け寄った。

「昨夜、ちと深酒をしたせいかな、今朝は早くに目が覚めてしまったな、お前に倣って散歩をしておつた」

「まあ、お父様つたら」

お酒の飲み過ぎは、お体に良く無いそうですわ．．．などと、小言を言う娘に、うむうむと笑顔で頷きつつ、その娘の細い肩を抱き寄せる。

「オーヴィスよ、この転婆者の犠牲になっておつたか？ 木登りなど、付き合わされたのではないか？」

王のからかいの言葉に、若いオーヴィスは何と答えたものか、絶句する。

「何だ、凶星か？」

ファールリユーラが、頬を赤らめると、王は楽し気な笑い声を上げた。

「あ、その．．．今朝もお父様はお寝坊なさると思つて、それまでのつもりで守役殿をお借りしておりました。偶然お会いしたからですよ、お父様」

何やら、ファールリユーラは言い訳じみる。良い良い、私もお前の守役を借りておつたからな、．．．などと返しつつ、王は笑う。

朗らかな気質のアガダル王は、昔から良く笑つた。それ故昔は、《光の王子》とあだ名されていたという。それ故ファールリユーラは《光の子》と名付けられたのだと信じていた。又、回りの者達もそう信じていた。そのファールリユーラも、冬の始めには十七の歳を迎える。

2・フアーリユーラ 6

年が変わって早々、アガダル王の十二になる長男の立太子礼が、華々しく執り行われる事となっていた。王がこれまで己が息子を王太子として立てないでいたのは、偏に弟王子に気兼ねしていた為であるが、弟のサラードル王子はサラードル王子で、昔から王位などという物にはてんで興味を示さない。それどころか十九の歳に王国を飛び出したまま、これまでくすつぽ国元へは戻らぬ有様である。尤も彼のおかげで、東の地はもう長い事安定してはいたのだが……。

王の長男が日毎成長するにつれ、王妃始め臣達が、立太子礼を求め口うるさくなつた。そして王弟サラードルは、東の地に己が骨を埋めたい旨を理由とし、正式に王位継承権の放棄を表明した。その事は、決してアガダルを喜ばせはしなかったが、一つの契機となつた。

王は、東からの使いが齎した弟王子よりの文書を読み終えると、諦めきつた表情で溜息を一つ洩らした。東にて死す事を望むなどと……、だが仕方が無い、あの弟の言う事だ……、王になるなど、まっぴらごめんだと、あれは昔からそう言っていたではないか……。王は、そう己に言い聞かせた。そして年明けと共に、立太子の礼が執り行われる運びとなつたのである。

ファアリユーラは、乳母と数人の侍女達に式服の着付けをさせながら、しきりと溜息を洩らしていた。王城の中のファアリユーラの私室での事であった。彼女とて王家の子女、城内に私室位は与えられていた。だがその部屋部屋が使われたのは、実は数える程の日数にしかならない。

「姫様ひいさま、何とお美しいんでしょう。乳母やは鼻たこが高たかつございますよ」

姫君を元気づけようと、乳母の声は態わざとらしい程に明るい。ファアリユーラは何十回目かの溜息を吐く。用意が整うと、正装姿のシヤドスが顔を出した。

「おお．．．．．」
守役は、嬉しそうに瞳を輝かせた。

今日の為に新たに作らせた紋繻子の衣装。見事な銀髪は髪結い侍女によつて、ここぞとばかりに複雑に編み込まれ頭の天辺に結い上げられていたかと思いきや、そこから姫君の背へと煌めく滝の如く流れ落ちている。そしてうら若い花かんはせの顔には、薄らと化粧が施されていた。

「何と、これがあの我が主君であられるお転婆姫か？姫は間違い無く、大陸一の美姫でしょうとも！」

「シヤドスの嘘つき。大陸中の女の人の人なんて知らないくせに．．．」

ファアリユーラは、沈んだ表情のまま拗ねるような口調で言った。
「言葉の綾ですよ、姫。その式服良くお似合いですよ、私の趣味も中々のものでしょう？」

ファアリユーラはふと、身に着けた衣装に目を落とした。そして心持ち口元を綻ばせた。此度のファアリユーラの式服の布地は、誰あるうこの守役が選んだ物であった。ファアリユーラが衣装を新調する為に業者が呼ばれると、シヤドスは物色に付き合わされるのが常であった。そして此度もその例に漏れず彼は布地選びに付き合い、

彼が選び出した空色と紺碧の布地で縫われた衣装を、今ファア
ーラは身に着けているのである。

山ほどの錦や繻子などに埋もれる様に座って、乳母と共にあ
でもないこうでもないと言いながら布を物色していた姫君に、シャ
ドスはふと目を引かれた空色の布地を広げて見せると、ファア
ーラはそれを暫しじつと見つめて呟いた。

『オーヴィス卿の瞳の色みたい．．．．．』

シャドスは慌てて紺碧の布地を引つ張りだすと、それを薦めた。

姫君はその色柄も気に入ったのだが、それよりも空色の物を甚くいた気
に入り、そのままそれらの布地に決まったのであった。

「ああ、気の重い事．．．．」

「式の後の祝宴は、早々に下がられて構いませんから、辛抱なさ
つてください、姫」

シャドスは、氣遣わし気に優しく言った。

「ええ、分かってるわ．．．」

哀れな程に消沈しているファア
ーリユーラは、城の式典の類いが不
得手であった。慣れていないという理由もあつたが、何よりも王妃
とその取り巻きが苦手であつたのだ。王妃は、王が溺愛する庶出の
ファア
ーリユーラに悪意さえ抱いていた。神秘の恵みを受けたファア
ーリユーラには、それが良く分かる。そして、ファア
ーリユーラの母が
村娘であつたという事で、あからさまに彼女を軽んじる貴族たちの
眼差しや含みのある言葉の端々。だがこんな時、守役シャドスは素
晴らしい働きを見せる。このシャドスは、時と場合と相手によつて
痛烈な毒舌家に変貌するのである。彼が社交辞令の魅力的な微笑
と共に、絶妙のタイミングで繰り出す皮肉の数々、その毒舌家ぶり
は中々に見物である。

『シャドスって、実はものすごく意地悪だったのね？』

以前ファア
ーリユーラがシャドスに言った。

『なあに、そうでもなければ守役など勤まりませんよ、姫。』
《剣

には剣を、拳には拳を、言葉の暴力には言葉の暴力を」という言が
あつたでしょう?」

「あつたかしら．．．?」

「ありましたとも!この私による格言です」

そう言つてシャドスは、悪怖れもせずに笑つたものであつた。フ
アーリユーラはそれを思い出し、くすつと笑い声をたてた。

「おやおや姫、人の顔見て何ですか突然?傷付くではありません
か。私の顔はそんなに面白いでしょうか?」

くすくす笑いを続けるフアーリユーラに、シャドスは黒い瞳を丸
くしている。

「違うのよ、貴方はきつと大陸一の守役だと思つただけよ、シャ
ドス」

「やれやれ、大陸中の守役をご存知なのですか?姫は」

「やあね、言葉の綾よ」

肩をすくめるフアーリユーラに、分かつていますとばかりにシャド
スは笑つた。

「さあ姫様ひいさま、シャドス卿、お時間だそうにございますよ」

「おおつ!乳母殿も、今日は一段とお美しい」

ご丁寧に手振りまで交えて乳母を褒めるシャドスの芝居じみた口
調に、フアーリユーラが再び可笑しがる。シャドス卿のお口の上
手でいらつしやる事．．．などと言つて、乳母レティは苦笑する。
フアーリユーラの緊張は解ほぐれていた。

その日、どれだけの人々が国王の一の姫の姿に驚き、見惚れた事
であつただろうか．．．。その美貌も然る事ながら、その青み
を帯びた銀の髪の見事さに．．．。そして今は亡き王姉の美
貌をまざまざと記憶する人々にとっては、前まへの大巫女クウィンディ
ラ姫に酷似したその顔立ちに．．．。

主役は、この日正式に王太子に立てられた彼女の弟王子であったにも拘らず、人々——殊に、久方ぶりに、成長したファアリユーラ姫の姿を目にした貴族や豪族たちは、専ら銀の姫君の姿を目で追ひ、互いに彼女の噂をした。その事が王の正妃を酷く不快にさせた。見る度毎に光り輝いてゆく庶出の王女。どこの雌猫の腹から生まれ落ちたかも分からぬ分際で．．．．と、憎々し気に呟きながら王妃は悔しげに齒噛みする。良人は王都を留守にしない限りは、毎週必ずあの娘をおとなう。己が東の地より遙々嫁いで来たその最初の週でさえ王は、見知らぬ地で不安な心を抱えていた新妻である己を捨て置き、あの小娘の元へ行ってしまった。その時の惨めな思いは、未だ心に凝っている。王妃は情けなさとおく惜しさから、この継子を憎んだのである。

王妃の憎悪——負の感情が、ファアリユーラの心を苦しく締め付けた。神秘の能力ちからを持つファアリユーラは、負の感情を向けられると、それをそのまま心に感じ取ってしまう。神殿で鍛錬を積んだ能力者ならば、そういった良からぬ感情からの心を守る術すべも心得ていたが、しかしファアリユーラはそういった鍛錬を積んだ事も無い。それ故、彼女は神殿の巫女たちよりも数段強く、そういった良からぬ感情を心に感じ取り、その毒気にあてられてしまう。

(王妃様は、今日も私の事を怒っている．．．．。とても憎んでいる．．．．．)

胸に流れ込んで来る王妃のどす黒い感情が、ファアリユーラを哀しくさせた。何故怒るの？何故憎むの？きっと自分が王妃自身の娘ではないからなのであろうと、これまでのファアリユーラはごく単純に考えていたが、今日の王妃のファアリユーラに向ける瞳には、酷い妬みの色が含まれている事に彼女は気付いた。何故．．．？ファアリユーラには、王妃が自分に嫉妬する理由は分からなかった。

立太子礼は荘厳な空気の中、滞り無く行われた。年の明けて間も

ない冬の最中、遠方から足を運ばねばならなかった者たちにとっては、大層も無い事であったが、雪が降らぬだけまだましである。このロセアニアで雪を見る事は少ない。仮に降ったとしても、積もる事は滅多に無い。冬が暖かなのかというと、決してそういう訳ではなく、細い水路や湖などが凍結するところを見れば、それなりに厳しい事が分かる。暗海から吹き寄せる風も、凍える程に強く冷たい。そしてどんよりと曇る空から落ちる雨は、時に優しく、時に激しく大地を叩いた。今日も大地は、雨に濡れている。

正式な場で、ファールリユーラが父王の傍らに座を与えられる事は無かった。正妃腹の子では無いファールリユーラは、王の一の姫でありながら、幼い弟妹たちよりも下座に席を与えられる。当然といえば当然の事であった。ファールリユーラがそれを恨んだ事は無いが、弟妹達の向こう側に座を占める父を盗み見る時、ファールリユーラの心には一抹の哀しみが過る。こういった式典での父王は、とても重々しく、近寄り難ささえ感じ、そしてファールリユーラ独りだけの父では無かった事を、改めて彼女に思い知らせる。碌に口をきいた事も無い弟王子達と妹姫達の父親でもあるという事を……。

突如心に生じた寂しさを振り払おうと、ファールリユーラは辺りに視線を廻らせた。多くの貴族達の中に、あの黒髪の優しい青年の姿を見付けた。胸が締め付けられる様に、重く甘く痛んだ。黒の正装姿が、普段にも増して凛々しかった。青年の蒼い瞳も又、ファールリユーラを見詰めていた。優しい気に、そして切な気に……。

2・フアーリユーラ 7

「何を熱心に見ているのだ？」

「あ、兄上」

我に返ったかの様な弟の表情に、シャドスはやれやれと小さく溜息を吐いた。この歳若い弟が、祝宴の席のフアーリユーラ姫に目を奪われていた事は、どうにも疑い様が無かった。

「おいおい、止めてくれよ、オーヴィスよ。庶出とはいえ王家の娘だぞ、頼むから分別を持ってくれ」

シャドスは辺りを憚りながら弟の耳元に囁く。

「分かっています、兄上。でも私が勝手に心に思う事くらいは許して下さい」

そう言つてオーヴィスは溜息を吐く。

「あんな人は、きつと大陸中の何処を探したつていないに違いありません、兄上……」

エディンヴァルの気風に似ず真面目で一本気な気質の弟だけに、シャドスは不安になる。姫に付いた悪い虫を取っ捕まえてみたら、守役の弟だったなんて事になってみる、笑うに笑えないぞ……などと内心考えつつも、シャドスは、道ならぬ恋に落ちるこの弟が不憫にも思えて来る。そして、こちらの方を—— というよりも、弟オーヴィスに度々視線を投げて寄越すフアーリユーラにも、守役シャドスはほとほと頭の痛くなる思いであった。

(これは早いところ、オーヴィスには妻帯させた方が良くもしれない……)

大貴族エディンヴァル家の子息であり、現王の近習である。妻の

なり手は幾らでもあるであろうとシャドスは考える。実のところ、この兄弟が婦人方に大変人気であった事は確かであった。殊、シャドスに至っては、この宮廷の貴族社会からは《性格破綻者》というレッテルを頂いておりながら——それは専ら、彼の毒舌の洗礼を受けた者達の吹聴によるものであったが——、それでも何故か、王城にはファールリユーラ姫程では無かったにしろ、滅多に上がらなかつたにも拘らず、婦人方だけには人気があるのである。

(オーヴィスの嫁……)

シャドスは大広間を見渡してみた。何とも華やいている。やはりファールリユーラ姫に匹敵する程の美人で無いとダメであろうかなあ……、などと考えながら辺りの娘達を物色してみる。とはいえ、どの家に弟に釣り合う年頃の娘がいるかなど、シャドスにはてんで分からない。

(こりゃあ、根回ししておいて向こうから来てもらうしか無いな……)

シャドスが内心そんな計画を立てている間も、隣の件の弟は、姫君を見詰め何とも切ない想いを胸に抱いていた。

ファールリユーラをこれ程熱心に眺めていたのは、オーヴィスだけでは無かった。もう一人、密かに目を向ける者があつた。純白の衣に身を包んだ小さな老女であつた。

(何と……、何と……、先代様に生き写しとは……、そしてひしひしと感じられる、あの王女の神秘の能力はどうであろう……。王は何たる身勝手か！あの王女は、やはり巫女たるべき者、今一度、王に進言せねばならない……)

大神殿の大巫女は、そう密かに決心した。

真の暗闇の中を、紅い色が散らついた。
紅あか——深紅かと思えば、それは炎の橙だいたいとなり．．．
、黄が混じつた。

黄．．．．．、ああ、あれは涙だ．．．．．、黄なる涙
だわ．．．．．、生命いのちが歎いている．．．．．。

ファーリユーラは悲しくなった。

漆黒に紅蓮くれんが踊つた。

ファーリユーラは畏れた。

紅くれない——紅の涙．．．．．、ああ．．．．．、あれは．．．
、これは．．．．．、私の涙だわ．．．．．。

漆黒に散っていた色が一瞬にして消え失せた。一面の闇となった。
ファーリユーラは怖くは無かった。むしろ、少しほっとした。だが
次の瞬間、漆黒の闇にどす黒い紅くれないが垂れた。黒に落ちた紅あか。

ああ、まるで血の如き．．．．．

誰かがそれをかき混ぜた。かき混ぜた。

紅が、闇よりも深い漆黒の中をくねくねと流れた。墨流しのよう
に．．．．．。

そこでファーリユーラは目を醒した。夢であった。時は真夜中、
王城の一室であつた。胸がどきどきと鳴っていた。汗で髪が頬に張
り付いていた。

「嫌な夢．．．．．」

ファーリユーラは怖れた。良く無い夢だと思つたのだ。

この時期、雨が良く降る。止んだかと思えば降り、又止んだかと思えば降って来る。そして今日も、やはり雨であった。ゆるくしとしと降っていたかと思えば、酷く強く降ったりの繰り返しであった。

フェアリユーラは窓の木戸を細く開け、空を見上げて不満顔であった。もう何日も雨ばかりなのである。散歩を楽しむ事も出来やしない。

「姫様、^{ひいさま}お風邪を召されますよ」

獣脂の灯火の中、乳母は縫い物をしながら姫君をたしなめた。この時代、窓には硝子など入ってはいない。それ故、寒い季節ともなると木戸を閉めるので、日中でも屋内は暗くなる。

フェアリユーラは小さな溜息を付いた。急に雨脚が強くなり、雨が室内に吹き込んで来た。フェアリユーラは慌てて木戸を閉めると、小さく悪態を吐きつつ、暖炉の傍へ来て両手を翳した。フェアリユーラの耳に、笑い声が聞こえた。悪戯好きの風の娘達の声では無い。もっと落ち着いた、深みのある、それでいて若々しい声。

“あの若者の事を考えているのだな？フェアリユーラ”

炎の声に、フェアリユーラの頬が染まった。すると炎達は俄に騒がしくなる。

“はははっ、フェアリユーラの顔が赤くなった”

“はははっ、フェアリユーラが恋をしている”

“フェアリユーラが、あの若者に恋をしているぞ”

炎の精霊達が合唱を始めた。

“んもうつ！うるさいわね貴方達っ！”

フアーリユーラは毒突いた。勿論言葉にはせずに。

彼女は炎の傍を離れ、レティの傍に座ると刺繍針をつまみ上げ、刺しかけだった刺繍を再び始めた。

“その手巾てぬぐいは、あの若者の為の物だな？”

フアーリユーラは思わず針で己の指を突ついてしまった。精霊達に隠し事は出来ない。やれやれと、フアーリユーラは思う。

“我々の姿を刺繍しておくれ。そうしたらお前の為に、あの若者を守ってやろう、フアーリユーラ”

“本当？でも貴方方精霊は、気紛れですもの、信じられないわ”

“おやおや、そんな事は無いさ。お前があの若者を想い、あの若者がお前に誠実でいる限りは、我々はこの若者を守ってやるとも、フアーリユーラ”

“風の娘達も、同じ事を言ってくれたわ”

炎の若者達が、静かな笑い声を立てた。

“なれば、風の傍らに我々の姿を入れておくれ、フアーリユーラ”

フアーリユーラは口元に笑みを浮かべ、少し考える振りをして見せた。炎の若者達は、風の娘達が好きである。何せ風の娘達は、炎に力を貸してくれる。

“なあ、フアーリユーラ、良いだろう？”

“ 我らの姿を、刺繍しておくれ ”

“ そうしたら、あの若者をどんな炎からも守ってやる ”

“ どんなに凍える様な寒さからも守ってやる ”

う ”

フェアリユーラは、暫し炎達を焦らして後に頷いてやった。始めから拒むつもりなど無いのだ。

“ では、約束しよう、あの若者を守ると ”

“ ふふふつ、ありがとう、炎の貴公子方 ”

フェアリユーラの脳裏を、あの青年の実直そうな笑顔が占める。消しても消しても、それは浮かんで来る。

(私．．．．、本当に恋をしているのかしら．．．．？あの人の事が頭から離れないのは、本当に恋をしているからなの？)

表の風が、木戸をがたがたと鳴らした。

「まあ、酷い風です事．．．．」
乳母が呟いた。

“ フェアリユーラ〜！ ”

“ フェアリユーラ〜！ ”

どうやら風の娘達が、一所懸命に木戸を叩いているらしい。

“ あの若者が来るわ〜！ ”

“ 蒼い瞳の若者が来るわ〜！ ”

「えっ！！」

フェアリユーラはびっくりして思わず立ち上がった。

「姫様、如何されました？」

突然立ち上がったファールリユーラに、乳母も驚きの眼差しを向ける。馬の嘶きが聞こえた様な気がして、ファールリユーラは窓辺へと駆け寄り、木戸を開いた。途端に風の娘達が室内に躍り込み、嬉しそうにファールリユーラに絡み付く。

“ご覧、ファールリユーラ！”

激しく地を打つ雨の白い飛沫の中、馬を駆けさせて来る者があった。

「まあ、どなたでございましょう、この雨の中を」

気付くとレティも立ち上がり外を覗き見ていた。ファールリユーラは、木戸を勢い良く閉めると、飛ぶ様に居間から駆け出して行った。

「何て雨だつ！ くそつ！」

慈悲も何も無く打ち付けて来る雨に、オーヴィスは毒突く。名家の子息とはいえ、未だ十九の若者である。時たま貴婦人には聞かせられない様な言葉を吐きたくなる事もあった。尤も彼の場合、そんな機会はそう多くも無かった様だが、その時の彼は珍しくも機嫌が悪かったのだ。それはこの激しい雨などのせいでは無かった。では、一体何故………？

青年は、その為にこの雨の中を馬を飛ばしてここまでやって来たのであった。

ファールリユーラが重々しい扉を開いた時、オーヴィスはちょうど馬から飛び降り、横殴りの雨の中を慌てて駆けて来た馬番に手綱を渡す処であった。彼は風に吹き飛ばされない様に、マントのフードを押さえつつ入り口への石段を数段飛ばしに駆け上がった。そして……、扉口の銀の姫君の姿に気付き立ち止まった。ファールリユーラが数歩表へ出ると、その見事な銀の長い髪が風に舞った。愛らしい唇を尖らせ、両手で髪を押さえる姫君の姿が可愛らしく、オーヴィスの口元には本人も気付かぬ内にほのかな笑みが浮かんでいた。

「姫君、どうか中へ、貴女が濡れてしまいます」

オーヴィスはマントのフードを下ろし、右手を胸にうやうやしく頭を垂れた。

「お独りなの？」

ファールリユーラは何と言って良いか分からずに、尋ねるまでも無

い事を口にする。

はい．．．．．、青年は首肯し、一瞬俯く。

「申し訳ありません．．．、貴女を無駄に期待させてしまいましたでしょうか、姫君．．．。陛下はご多忙の上、本日はお越しにはなられません」

オーヴィスの申し訳無さそうな表情に、ファールリユーラの胸が痛む。

違うの！．．．．．ファールリユーラは叫びたかった。だがそれよりも早く、乳母が二人の間に割って入った。

「早う中へお入り遊ばされませ、姫様ひいさま、オーヴィス卿も。しとどに濡れておいででござります故」

そう言うや乳母は、ファールリユーラの細い肩を抱える様にして、半ば強引に屋内へと連れ戻った。

慌ただしい足音と共に数名の侍女達が駆けつけ、濡れた体を拭く浴布を差し出す。

「オーヴィス卿、如何なされましたか？ この雨の中を．．．」

レティは手早くファールリユーラの髪を拭いてやりながら、黒髪の貴公子に尋ねた。

「お騒がせして申し訳ありません。今日は私事わたくしごとで参ったのです」
オーヴィスは雫の滴るなめし革のマントを脱ぎ、下僕の受け取るに任せつつ、申し訳無さそうに答えた。

「私事？」

ファールリユーラが首を傾げた。

「はい．．．．．、シャドス・デ・ラ・エディンヴァルに取り次ぎを願いたいのです」

「この酷い雨の中、貴方様がお供もお連れにならずにお出でになられたという事は、大切な御用事なのですね？ でもその前に、お召し替えをなさらなければなりませんよ、オーヴィス卿。いかに強靱なげでお若い貴方様でも、その形ではお体を壊しましょう。出来れば

湯をお使いになつて、まずは冷えたお体を温めなされませ、湯の仕度をさせております故」

レティは青年の水滴の滴る黒髪を、まるで母親の様な仕草で拭いてやる。

「貴方様の兄上殿に着替えをお借り致しましょう。ついでに貴方様のお越しをお伝えして参りましょう、オーヴィス卿」

そう優しく言つと、レティは浴布を青年に手渡した。

かたじけな
「忝い、乳母殿」

青年は微笑み頭を下げた。

「姫様はお部屋へお戻りなされませ、お体が冷えますよ」

乳母はファールリユーラを促すと、傍らの侍女に、オーヴィスを別室へ案内する様に命じてから姿を消す。ファールリユーラは用心深く乳母の背を見送ると、侍女がオーヴィスを案内しようとするのを遮る様に青年の冷たく冷えた腕を掴んだ。その袖は心持ち絞つただけで、雫が滴る程に濡れそぼっている。

「姫君．．．？」

オーヴィスは、ほんの少しだけ驚きに見張つた瞳をファールリユーラへ向けた。その蒼い瞳にファールリユーラの胸は締め付けられ、重く痛んだ。侍女が何か言つたがファールリユーラは軽くあしらつと、胸の痛みを振り切ろうとでもするかの様に、青年の濡れたそぼつた腕を快活に引つ張つて行つた。

「ファールリユーラ姫？ 如何されたのですか？」

「良いからお出でなさい」

戸惑いながらもオーヴィスは、腕を引つ張られるままに姫君の後に付いて行くと、灯りの点つた部屋の暖炉の前にたどり着いた。先程までファールリユーラと乳母レティが、刺繍を刺していた居間であった。

「ああ．．、何とありがたい．．．」

「でしよう？ オーヴィス卿」

氷をも溶かすやと言つ程に暖かく優しい青年の微笑に、ファールリ

ユーラも嬉しくなり微笑む。炉の炎が一段と大きく強く燃えた。

“ありがとう、炎の殿方達”

ファールリユーラは、勢い良く燃え盛る炎に一瞥を投げた。炎の精霊達は、小さな笑い声をたて、そして口を噤んだ。

ファールリユーラは、オーヴィスの手から浴布を取り上げると後ろに周り、その細身でありながらファールリユーラよりも格段広い背を拭いてやる。青年は大いに狼狽え振り返った。

「なあに？ 向こうを向いていて頂戴、オーヴィス卿、背を拭いて差し上げるから」

尚も後ろへ回り込もうとするファールリユーラに、オーヴィスはとんでもないとばかりに身を躲す。背をとられんとするオーヴィスは、その背をとらんとするファールリユーラと共にその場をくるくると回る事になり、結果的に二人は数度回った処で、目を見合わせて笑い出す事となった。

「いいえ．．．、そのような事は、姫君がなさるべき事ではございません故．．．」

笑いながらも、まだ戸惑いがちな青年に、ファールリユーラは首を傾げて微笑んだ。

「あら、良いじゃないの、ここは王城では無いのですもの。それに貴方、そんなにぐしゃぐしゃに濡れてしまっているのですもの．．

．．。なめし革の外套も、余り意味が無かった様ね」

「風が恐ろしく強かったものですから．．．．．」

後で風の娘達に文句を言っただらねば．．．．、ファールリユー

ラは密かに思いつつ、手を伸ばしてオーヴィスの頬を拭いてやる。

青年の蒼い瞳が、ふと切な気な翳りを帯びた。その瞳に見詰められ、ファールリユーラははにかみ咄嗟に手を引っ込めた。胸が鳴り出し、思わず視線を逸らす。

「シャドス卿は、今小姓達に剣の稽古をつけてやっているの．．．」

何の脈絡も無く、ファールリユーラは呟いた。オーヴィスは無言で

あった。ファールリユーラは再び青年を見上げた。小さな溜息が漏れた。その瞳を見たら、泣きたくなかった。目の前の青年の心が、ファールリユーラを想う気持ちで溢れんばかりである事が分かったからであつた。そして．．．、そして、彼はそれを哀しんでいた。それを感じ取ると、ファールリユーラは更に悲しくなつた。己の瞳に膜の張るのが分かつた。それが膨れ上がるのも、押さえる事が出来ない事も．．．、分かつた。

「ファールリユーラ姫？ 姫君．．．．？」

青年の気遣わし気な優しい声が、ファールリユーラの名を奏でると、彼女の瞳からは透き通つた雫がぼろぼろと零れ落ちた。

「如何されたのです？ 我が姫？」

オーヴィスは背を屈め、哀し気な瞳のままファールリユーラの澄んだ琥珀色の瞳を覗き込んだ。

「貴方が．．．．、とても哀しそうだから．．．．」

「．．．姫．．．．」

面食らつた様に小さく呟き、それでもオーヴィスはやがてあの優しい微笑を浮かべる。

「それは、申し訳も無い事を．．．」

この少女が愛しかつた。どうしようも無く愛しかつた。オーヴィスは、恐る恐る伸びる己の手を止める事が出来なかつた。総てを失つても良いと思える程に愛しい姫君の、零れ落ちる宝石の様な涙をそつと拭う己の手を止める事が出来なかつた。

ファールリユーラの華奢な白い手が、頬に触れるオーヴィスの手に重なる。

「この世界の何よりも．．．．、誰よりも．．．．、貴方が好きよ．．．．、オーヴィス．．．．」

濡れた瞳で青年を捕え、少女が囁いた。

これ程の溢れる想いを、どうやって止めれば良いのか．．．、オーヴィスには分からなかつた。そんな事は不可能だと心が叫びを

上げた時、彼の蒼い瞳からも一筋、雫が伝い落ちた。

「私も……、この世界の何よりも……、貴女が愛
しい……ファースト・リユース……」
苦し気で、哀し気な囁きであった。

「やっぱり来たか？オーヴィスよ」

着替えを済ませたオーヴィスが練武室へと足を踏み入れると、兄シャドスは弟を認めるなり、そう言った。

「まさか、こんな悪天候の中を飛んで来るとは思わなかったが……」

小姓達の稽古は終わったらしく、練武室には今、この兄弟しかない。

「兄上……、私は嫌です」

開口一番のオーヴィスの言葉は、シャドスも半ば予想していた物であった。

「良い話だと思うのだがな、お前にとっても、エディンヴァルにとっても」

「なれば兄上がお受け下さい」

オーヴィスはきっぱりと言った。この弟にしては珍しく反抗的だとシャドスは考えるも、無理も無いであろうかとも思う。

「先方はお前を名指しして来たのだ。カドラードの息女は、お前に恋慕しているらしいからな」

「私は、その御息女を知りません」

「何だ、知らんのか？あの美女を？噂位は耳にしているだろうが？いくら堅物のお前でも……」

オーヴィスは不機嫌そうな蒼い瞳を兄から逸らした。

カドラード家

エディンヴァル家に匹敵する名家であ

つた。だが不幸な事に、現当主には十八になる娘以外に子が無かった。一昨年、跡継ぎであった子息が三十六の歳で、病の末に子も無いまま身罷ってしまったのだ。それ以外の子息等も、親不孝にも既に先立ってしまっていた。残されたのは、今では十八の末娘唯一人であった。老齡のカドラードの当主は、跡目を継がせる為の娘婿を求めていた。そして彼が白羽の矢を立てたのが、国王の近習を務めるエディンヴァル当主の弟であったというわけである。無論エディンヴァル当主の巧みな根回しが功を奏した事は言うまでも無いのだが……。

「オーヴィスよ、カドラードには跡目を継ぐ者が必要なのだよ。当主は、お前をとて買つて下さっている。考えてみたらどうだ？ お前は今、エディンヴァルの跡継ぎではあるが、私に子でも出来ればお前は唯の当主の弟だ。カドラードの家督を継ぐ方が良いであろうか？ どう考えたって……。尤も、私に子が出来なければ、エディンヴァルの家督も継いでもらわねばならないだろうが」

オーヴィスは、無言のままであった。

「姫を思い切る、良い機会なのではないか？」

オーヴィスは顔を上げて兄を見た。そこには、たった一人の弟を案ずる兄の瞳があった。

「少し……、考えさせて下さい、兄上……。」

オーヴィスの力無い懇願に、シャドスは頷いた。

冬の暗海^{あんかい}は、波が荒々しい。日の神の長い不在を拗ねた風の精霊達が、海に八つ当たりをするのである。

頭からすっぽりと毛織りのシヨールを被った小さな老婆は、そんな冬の暗海を暫し眺めた。王はやはり首を縦には振らなかつた。名

君との誉れも高いアガダル王も、話が銀の姫君の事となると痴れ者になる。

『いかな大巫女殿の仰せとはいえ、そればかりは出来ぬ』

王の頑な様を思い起こすと、大巫女の心の内には大きな怒りが沸き起こる。

(愚か者め！あたら能力ちからに恵まれし娘を．．．．、精霊達の加護を受けし娘を．．．．、この大巫女よりも勝すぐれたる能力を秘めた娘であろうやというのに．．．．)

大巫女は、結んだ掌を怒りに震わせた。

「大巫女様、どうぞ中へ。冷えはお体に毒でござりまする」

後ろからひっそりとした声で話しかけられ、老巫女は今気付いたとでも言うつかの様に寒さに身を震わせた。

「そうじゃな、そうしよう」

大巫女には、このところ頓に気にかかる事が有った。大いなる魔物の封じられた地の封印が、昔に比べ綻びやすくなっているのだ。以前よりもそれを繕つくろわねばならぬ頻度が高くなっているのである。

人間の持つ神秘ちからの能力は、時と共に弱まっているのである。．．．。だが魔物の力は衰えない、大巫女は空恐ろしい予感がした。

王は書状を広げながら、深い溜息と共に眉間を押さえた。先日の嵐で北の地域では水害が起きていたが、つい先程使いが知らせて寄せ越した被害状況は、思ったよりも酷い模様であり、直ちに援助の物資を届けさせねばならない。

北の海は荒い。昔から度々荒れては、その地を飲み込み甚大な被

害を出して来た。また土木事業の為、国庫のどれ程を費やさねばならぬのか。前回の洪水の後、かなりの国費を費やし大掛かりな堤防を築いたというのに．．．．、その一部が決壊したという。

アガダル王は、取りあえずの支援物資と援助の人材を早々に送り出す様に命じてから就寝の為に席を立ち上がった。夜も更けている。王の表情には疲労の色が濃かった。

「私も近々様子を見に行く。良いな？宰相よ」

去り際に、王は宰相の皺の多い顔を振り返る。

「止めてもお出でになられるのでありませんよう？陛下」

「まあな、堤防の決壊がどれ程の物であったのか、王として見ておく必要があるう。それに民を励ましてやりたい」

「分かりました、陛下」

「オーヴィス、供をせよ。他の人選はお前に任せる。忍んで行く故、余り仰々しくするな」

「御意」

頷くオーヴィスの手前で、宰相は皺の寄った顔の眉間に更に深く皺を寄せた。

「お言葉ながら陛下、最低限の護衛はお連れ下さいますような？」

「分かっておるから、案ずるな。お前ももう寝ろ、年寄りに夜更かしはきつかるう？」

王は宰相をからかうと、守役を伴って執務室を後にした。

「暫くは娘をおとなってやれぬな．．．．」

溜息混じりの王の言葉に、オーヴィスはフアールリユーラを思い浮かべる。

『お父様が恋しい時は、ここからお城を眺めるの．．．．』

姫君の淋し気な言葉が甦った。

「書状でもしたためて、機嫌を取っておくか・・・」

「きつとお喜びになれましょう、姫君は」

照れ隠しなのか苦笑気味に言う王の言葉に、オーヴィスは微笑む。そつえば・・・と、王が守役の青年を振り返った。

「お前には、カドラーの娘との婚姻の話が持ち上がっているそつうだな？オーヴィスよ」

思い出した様に尋ねる王の言葉に、オーヴィスは一瞬、表情を曇らせた。

「はい・・・、どうも、そのようです」

「何だ？気の無い素振りだな。気に入らぬのか？」

「い、いえ、滅相もございません、陛下」

オーヴィスは慌てて否定した。

「ただ、私には過分な話かと・・・」

口ごもり視線を落とす傍らの青年の姿に、王は、ふむと小さな声を漏らし、何やら物思つ風であった。

静かな室内に流れる哲学的とも言える話の内容の半分さえも、フリーリユーラの耳には入っていないかった。確かに教師の話は、若いフリーリユーラにとって手放しで面白いと喜べる内容の物では無かったが、それでも普段ならばきちんと礼儀を弁え、授業を聞くフリーリユーラであったのだ。心ここにあらずの態であるフリーリユーラの様子に、教師は授業を中断させた。それにも拘らず、無言で座つたまま身動き一つしない少女に、教師は困つた様に声をかけた。

「あ、はい、ええと・・・」

慌てて目の前に開いていた本に目を落とすフリーリユーラに、老翁は、柔和な笑い声を立てた。

「如何されましたかな？姫様。この処、ご勉強に身が入らぬご様

子ですな」

「先生……」

フアーリユーラは顔を赤らめた。

「ごめんなさい……」

「ご不在のお父君のご心配をしておられるのですかな？それとも、他に姫様のお心を悩ませる事でもおありですか？」

「……モザルス先生は、何でもお見通しね」

フアーリユーラは極り悪そうに小さく肩を竦めた。旅の空の下にいる父王を、確かに案じていた。だがモザルス老師の指摘通り、それだけでは無かった。

「北の方では、この間の大雨で沢山の人々が家を流されてしまったのでしょうか？先生」

「はい、北の土地は、この辺りと異なり土地が低いですからなあ……、加えて北の海の神は、気が荒いですからな」

「もう、そんなに危ないところには住まなければ良いのに」

「そうですねあ、姫様の仰せの通りなのですが、その土地の者達にしてみれば、住み慣れた土地を離れたくは無いでしょう……。何より、かの地には土着の神がお出でになります。その神を捨て、他の地へ移り住むなどは、北の民達には思いも寄らぬ事なのでしょう」

「その神は水から彼らを守っては下さらなかったのに？」

「民達は、神の祟りだと、こう考えましょう」

「神の祟り……」

フアーリユーラは呟いた。

「本当にそうかしら……」

神殿の巫女や神官達は、どう考えているのだろう……。フアーリユーラは、ふと疑問に思い溜息を吐いた。彼女は知っているのだ。北の地の土着の神とは、風の神だという事を。特に力を持った、気の荒い風の精霊達なのだ。この辺りに住む風の娘達が、そう

教えてくれた。北の海の精霊達の気が荒い事も、風の娘達により聞き知っていたし、日の神の留守の間、風の精霊達の気も塞ぎ、海の精霊達とよく争うのだという事も聞き知っていた。だからそれは、祟りなどでは無いのだ。だがファアリュウラがそれを口にすることは無かった。何故なら、そういった事を語る事を、父王に堅く禁じられていたからである。父王はファアリュウラの望む事の多くを許してくれたが、ただ彼女の持つ神秘の能力が、微塵でも人に知れる恐れのある場合は決して許してはくれない。

万が一、その能力が人知れる処ともなれば、ファアリュウラは神殿に入る事を余儀なくされるであろう。それは父王だけでは無く、彼女の望む処でも無かった。神殿に入る事になれば、今までの様に父王と共に楽しい時を過ごす事は適わなくなるであろう。そしてあの青年、夏の空の様な蒼い瞳をした青年の姿を見る事も適わなくなる。．．．．．。

「オーヴィス．．．」

ファアリュウラは、人知れず恋しい青年の名を呟き、溜息を吐いた。今頃は、何処の空の下にいたのである。．．．。

モザルス博士の講義が終わった後も、ファアリュウラはその場に留まったまま、ぼんやりと考え事をしていた。父王とあの青年が北の土地へと旅立ってから、早、日々も経っていた。予定通りならば、そろそろ王都への帰路についている頃だ。

「会いたい．．．」

胸の奥が、重く疼いた。だがそれは決して不快な痛みでは無い。ファアリュウラは甘く疼く胸を押さえ、大きく呼吸をする。

何時からだろう。．．．。自分は何時から、大好きな父王よりも、あの蒼い瞳の青年を心待ちにする様になっていたのでだろう。．．．。

あの嵐の日に知った、彼のファアリュウラへの溢れる程の想い。そして同時に感じ取ってしまった彼の、その想いに対する哀しみと

苦しみ。神秘の能力ちからなど、無ければ良かったとあの時思った。何故自分はこんな能力を持って生まれて来たのか……。人の強い感情を感じ取ってしまう事は、苦痛の方が多かった。それが愛情や幸せな感情なら、心地も良い。だが憎しみや苦しみ、悲哀の感情は、苦痛以外の何物でもないのだ。殊、あの青年の哀しみと苦しみともなれば……。殊、ファールリユーラへの恋心の為に彼が苦しんでいるともなれば……。

「何故貴方は苦しむの？何故哀しむの？私がお父様の娘だからなの？」

ファールリユーラは青年の面影に問いかけた。だが面影は何も答えず、ただ優しい笑みを浮かべているだけであった。

アガダル王が郊外の瀟洒な館に愛娘をおとなうのは、実に一月半ひとつきはんぶりの事であった。季節はハナサフランや水仙の咲き乱れる、そんな時期へと移り変わっていた。

「もう春だな。風が大分和らいだ」

愛馬を進ませながらの王の言葉に、オーヴィスは微笑みを浮かべ、同意の相槌を打った。

「あれの顔を見るのも久方ぶりだ、元気にしておるかな」

そう言つて低く笑う王の声には、喜びが滲み出ている。

「嬉しそうですね、陛下」

オーヴィスの言葉に、王はちらりと守役を振り返り「久方ぶりだな」と上機嫌で答えた。

「姫君も、きつと首を長くしてお待ちでしょう」

銀の姫君の嬉しそうな表情が目につかび、オーヴィスは再度微笑む。この一月半の間に、幾度彼女を夢見たか知れなかった。適わぬ恋を思うと、苦しく哀しかったにも拘らず、あの姫君を脳裏に描き想う事は、至福の時であった。

「お前も嬉しそうだな、オーヴィスよ」

オーヴィスは、はっと息を飲み王を見た。銀の姫君の面影は霧散した。

「あ．．．、そうでしょうか．．．」

口ごもる守役の青年に、王はからかうかのような瞳を向けている。

「実に嬉しそうな顔しておったが？」

「．．．まあ、私も兄の顔を見るのは久方ぶりです故．．．」
さりげなく言い繕うオーヴィスに、王は何やら意味ありげな瞳を
向けている。

「果たしてそれだけか？」

「．．．．．」

王の言わんとする事を量りかね、オーヴィスは言葉に詰まった。

王は低く笑うと愛馬の腹を蹴り、勢い良く駆け始めた。

『王家の血があのような形で色濃く出たは、不幸中の幸いでござ
ります、陛下。前の大巫女姫様に匹敵なさるか、もしくはそれ以上
のお力を秘めておらるる銀の姫様は、正に大巫女たるべきお方、何
卒、神殿に．．．．．』

王は、神殿の大巫女の言葉を思い起こしつつ、乳母と何やら楽し
気に言葉を交わしている愛娘の横顔を眺めた。そして幸薄かった亡
き姉姫を思い起こした。

（何と、良く似ている事か．．．．．。容姿だけならまだしも
．．．．．、その能力までを受け継いでしまうと．．．．．）

王は、瞼を閉じてその琥珀色の瞳を隠した。すると何処からとも
無く、敬愛して已まなかった姉姫の、透き通った美しい、だが巫女
以外の何者とも言えぬ、低く抑揚も暖かみも無い声が聞こえた様な
気がした。

（姉上．．．．．）

もしも．．．．．と、アガダル王は幾度考えたか知れなかった。も
しも、敬愛する姉姫があちかひの能力を持たずに生を受けていたら．．．
と。

仮令たとえ盲であつたとしても、真つ当な生涯を送つていたのではと．．．。フアーリユーラと共に、毎日穏やかに笑つて過ごす事も出来たのではと．．．。そして、そこではたと思ひ直す。否、きつとフアーリユーラが生まれる事は無かつたであろうと．．．。姉たとえが、仮令美しくとも普通の女であつたなら、弟王子もあれほどに歪んだ変質の愛情を彼女に抱き、苦しむ事も無かつたであろうと．．．。

「お父様？眠つてしまわれたの？」

娘の呼びかけに、現実(まこと)に引き戻された王は目を開いた。

「いや、考え事をしていただけだ」

「考え事？」

布ばりの長椅子に座る父王の隣に腰掛けながら、娘は小首を傾げる。

「お前も大きくなったものだと思つてな．．．。」

しみじみと語る父王は、フアーリユーラの頭を撫でながら低い笑い声をたてた。

(もう恋を知る程に大きくなったか．．．、早いものだ．．．)

娘の、オーヴィスに向ける瞳に、何時から恥じらいの色が見え隠れする様になつていたのであるうか．．．。そしてあの実直な若者は、何時からあの様な眩し気な瞳をフアーリユーラへ向ける様になつていたのであるうか．．．。王は、愛娘の細い肩を抱き寄せ、小さな溜息を吐いた。全く、早いものだ．．．と、王は再度心の内で呟いた。

然程も経たぬ内に、エディンヴァル兄弟が訪れた。すらりとした長身の見目良い兄弟は、大層婦人方に人気があるのだと、ファアーリユーラは以前、乳母や侍女達から聞いた事があった。その時は、軽く聞き流したものであったが、きつとその通りなのだろうと、今ふと思った。

「お呼びですか？陛下」

「うむ、話がある」

シャドスの後から入室して来たオーヴィスは、無言のまま頭を下げた。ファアーリユーラは、目を奪われたかのように青年を一時見詰め、そして俯いた。王はそんな娘の様子に、一瞬眉を上げるも、又すぐに兄弟へと視線を戻した。

「まあ、話というのは外でもない、エディンヴァルとカドラードの婚姻話の件なのだが……」

前置きも無く切り出された話に、ファアーリユーラは身を震わせた。婚姻……？誰の……？ファアーリユーラは、不安を隠せずに隣の父王を見上げ、そしてオーヴィスを見上げた。青年はちらと哀し気な蒼い瞳をファアーリユーラへ向けると、その瞳を俯けた。

「私は、出来れば異を唱えたいのだ、シャドスよ」

オーヴィスは驚きに顔を上げ、思わず王を見た。

「と、仰せになられますのは、陛下？何か不都合でも……？」
シャドスも多少の驚きに目を瞬く。

「うむ、不都合であるうな……。どう見ても、オーヴィスがこの話を喜んでおるとは思えん」

ファアーリユーラは息を飲んだ。衝撃であった。その様な話が持ち上がっていた事など、夢にも思っではいなかったのだ。血の気が引き、ファアーリユーラは見る見る蒼白となった。王はそんな娘の様子に左手を伸ばし、震えるその華奢な手を握りしめた。だがその事にすら、ファアーリユーラは気付くゆとりも失っていた。

「オーヴィスよ、他に心に想う娘がおるのでは無いのか？違うか

？」

王の低い声音は、水の如く静かに尋ねた。歳若い青年は困惑し、哀し気な瞳を王の愛娘へと向けた。

「やれやれ、何と分かり易い．．．．．。王は苦笑する。

「シャドスは、そんな弟の様子に内心溜息を吐いた。

「どう思っておるのだ？オーヴィスよ、その娘の事を。どれ程心に想っておるのだ？申してみよ」

「ファーリユーラがぎこちなく顔を上げた。オーヴィスは、姫君の今にも涙の零れ落ちそうな琥珀色の瞳を見詰め続けた。そして、やがて言葉を紡ぐ。

「我が命を、失っても良いと思う程に想っています、陛下．．．．．」

静かな口調であったにも拘らず、炎の如き言葉であった。ファーリユーラの瞳から涙が零れ落ちた。

「やれやれ．．．．．。王は満足げな溜息と共に、低く笑った。

「シャドスよ、カドラードとの話は諦めよ」

「はあ．．．．．陛下の仰せとあらば．．．．．」

「シャドスは溜息を吐き、諦めた様に小さく肩を竦めた。

「代わりに．．．．．」

「王の言葉は続いた。

「これを娶らせる」

「は？」

「王の言葉が理解出来ずに、シャドスは目を丸くした。

「これだ」

「王は繰り返しつつ、握っていた愛娘の手を持ち上げた。

「．．．．．陛下．．．．．」

「シャドスは絶句する。王以外の誰もが呆然とした。

「オーヴィス、私の愛し子を幸せにすると誓えるか？誓えるなら、お前にくれてやるぞ」

オーヴィスへと目を向けた王は、微笑をその口元に上せてはいたが、その琥珀色の瞳は笑ってはいなかった。ファールリユーラは泣き顔のまま父王を見上げた。

王に向けるオーヴィスの蒼い瞳から哀しみの色がみるみる払拭されていった。

「誓います、陛下、我が剣と、我が命にかけて！」

オーヴィスは、力強い瞳できっぱりと言い放った。

それを聞き遂げた王の瞳は、即座に和らぎ、そして実に満足げな艶のある笑い声が起こった。

「ファールリユーラはくれてやるぞ！オーヴィス！」

父王の手に背を押され、ファールリユーラはオーヴィスの元に駆け寄った。うら若い二人は互いに手を取り合い、潤む瞳で見詰め合い、そして幸せそうに微笑みを交わした。涙を零しながら……。

「陛下、本気で姫君を臣に嫁がせるおつもりですか？」

シャドスは、呆れ声を隠しもしない。だが呆れながらも、その表情は何とも嬉しそうな笑顔をたたえている。それが、心からのものである事に、長い付き合いでもある王が気付かぬわけも無かった。

「お前は、私と親族関係になるのが嫌なのか？」

「とんでもありません、嫌だなんて。私はただ、姫のお立場が心配なだけです」

ふんつと、王は鼻を鳴らした。

「他国との政略にとられるより良い。愚かな王族に嫁がせるよりもっと良い。お前の弟ならば、申し分無いぞ、シャドス」

王の言葉にシャドスは、満面の笑みの中、こそばゆそうな表情を垣間見せた。

「あれが嫁いだら、お前は又私の元に戻ってくれような？シャドスよ」

「喜んで、陛下」

シャドスは深々と頭を下げた。

「お父様！」

ファールリユーラが父王に抱きついた。王は上機嫌で笑いながら愛娘を抱きしめた。思えば王は、何時でもこの娘を案じて来た。不幸な出生故、不憫に思つて来た。正統な王家の血のみを受け継いだ娘であつたにも拘らず、それを公表出来ず、その為軽んじる者達の多かつた事も知つていた。だが王は今、満足であつた。娘の幸せそうな表情が、王にとっての幸せであつた。亡きクウインディラ姫が、そんな表情を見せた事など一度として無かつた事を思い出す。

幸薄かつた母の分も、幸せになるのだぞ．．．．．。王は、心の内で願つた。

それから一年の後、王城で若々しい二人の婚儀が執り行われた。祝福を与える為に招かれた老いた大巫女は憤つていた。王はこれで、神殿もこの銀の姫を諦めるとでも思っているであろう．．．．と。

大巫女は、怒りなど微塵も感じさせぬ巫女の無の表情で、初々しい花嫁と、凜々しい花婿に祝福を与える為に手を翳す。跪く見事な銀の髪の花嫁を、多くの精霊達が取り囲む様が大巫女には分かつた。大巫女がファールリユーラに祝福を与えるのは、彼女が生まれて以来であつた。ひっそりと人々から隠す様にしてに育てられたファールリユーラは、年に一度の生誕の日にも、大巫女の祝福を得た事は無かつたのである。大巫女は、アガダル王への怒りも忘れ、感嘆の溜息を漏らした。

「多くの精霊達に愛されし銀の姫様、精霊達を大切になされませ」大巫女の言葉は、お決まりの祝福の言葉では無かつた。だがそんな事も、花嫁には問題になりはしなかつた。傍らには、夫たるべきあの蒼い瞳の青年が、優しい眼差しで彼女を．．．、彼女だけを

見詰めていたのだから・・・。

豪華な婚礼衣装の長い裾を引きながら、ファールリユーラは愛する青年をうっとり見上げたのである。

2・ファールリユーラ 終

2・フアーリユーラ 10（後書き）

さてさて、第2章が終わりました。ここまでお付き合い下さった
お心広い皆様、本当にありがとうございます。

決して公表する事の出来ない出生の為、姫君は人々の目から隠され
れひっそりと育てられました。ですが養父の深い愛情から、彼女は
自由にのびのびと、何一つ不自由無く幸せに育ちます。そして年頃
の姫君が真実の恋を見付けた時、養父である王は、姫君の幸せの為
に、そして又ある思惑から、やや強引とも言える手段で姫君の結婚
を決めてしまいました。

さて次章は・・・、何やら暗雲が垂れ籠めて来そうな気配が無
きにしても非ずですが・・・、どうか引き続きお付き合い下さると嬉
しいです。

皆様に精霊達の加護のあらん事を・・・。

秋山らあれ

3・ターロの君とファールリユーラ 1（前書き）

アガダル王と神殿の大巫女の思惑が絡み合う中、臣下である青年と恋に落ちたファールリユーラ。それを知った王は、愛娘の幸せの為、又、愛娘を神殿から守る為に、神殿側の怒りを買いながらも娘を青年に嫁がせました。それから早、半年の月日が穏やかに過ぎ行きました。そんなある日、王弟であるサラードル王子が息子を伴い王都に帰還する事となりました。

3・ターロの君とフアーリユーラ 1

風は吹き荒ぶ。

もう、そんな季節であったか……。もう夏も終わりなのだ
な、ここでは……。そう、暗海にほど近い王都では風が良
く吹く。そうであったな……。馬上の貴人は懐かしぶ。
……。十年……。十年ぶりか……。まるで自嘲するかの様な笑みを口元に浮かべ、彼は遠くを見詰めた。王
都はもう目の前であった。この山を下り、明日中には王都に入れる
筈の予定であった。

「父上！」

少年とも少女ともつかぬ、それでいて生気の溢れる元気な声に呼
びかけられ、彼はゆっくりと後ろを振り返った。幼いが、己に良く
似た精悍さを伺わせる顔立ちを認め、父と呼ばれた貴人は口元をに
やりと歪め、手振りのみで息子を呼び寄せた。少年は、小振りな馬
に騎乗していたけれども、実に巧みに、まるで己の身体の一部の如
く愛馬を操り、父の隣に並んだ。

ジャスウィンドは十二歳。父譲りの琥珀色の瞳と、父よりも白っ
ぱい金髪をしていた。少し縮れたその髪質は、故郷に残して来た母
にそっくりだと良く言われる。

ジャスウィンドの母は、ナパド族の王の一番下の妹であった。だ
が少年の父は、一族の間では無い。ナパド族が加護を受けている
ロセアニア王国の人間であり、その国王の弟であった。それ故ジャ
スウィンドは、生まれ落ちた時から一族の中でも特別視される存在

であったのだ。

「見よ、あれが目指すが王都よ」

父は物憂げに腕を上げ、遠くを指差す。

「あの一際高いのが王城ですね？父上」

「良い目をしているな、ジャスウィンド」

そう言つて父は口元を歪めて低く笑う。

王都．．．．．、幼い頃より、ロセアニアの駐屯兵達の様々な話を聞いて育つた少年の、憧れて止まない都であった。石の壁に守られた都．．．．、風の都．．．．、雨の都．．．．

。ロセアニア兵達は皆、一様に王都の事をそのように言い表した。

内陸にだつて風は吹く．．．．、少年はよく不思議に思ったものだった。だが今、兵達が口にしていた意味を肌を感じた。．．．．

．．．風が違つ．．．．．。

「これが沿岸の風だ」

父は言つた。しみじみとした口調であつた。

ピーイイイツという啼き声と共に、曇り空を“王者”が飛来する。父子のちよつと上空を旋回したかと思うと、少年の差し出す籠手に被われた腕にその鋭い爪を掛け、数度の羽撃きの後に灰黒色の翼を閉じた。

“友よ、何故あんな都へ行きたがる？”

「気に入らないのか？」

その羽で、一足先に王都をつぶさに目にして来たのであろう、王者ターロに少年は尋ねる。

“人間と石が多すぎる”

ターロは不機嫌に答えた。

「我慢しろよ、付いて来るつて言つたのはお前だぞ」

“分かっている”

そう答えると、ターロは少年の肩へと軽く飛び移つた。

「お前の友はご機嫌ななめか？」

少年の父の言葉に、隼は一声啼いた。

「別にそういうわけでもないそうです、父上」

「そうか……」

父は、やはり物憂げに口を歪めて低く笑った。

この年の秋、王弟サラードルは、東の部族民の血を引く息子と、任期を終えた軍隊を伴って、王都へと帰還した。

王都

王城が良く望める高台の、貴族達が屋敷を構える地域のその一角に、新婚のファールリユーラとオーヴィスは新居を与えられていた。こじんまりとした美しい屋敷は、アガダル王からの贈り物であった。ファールリユーラが育った屋敷程の広さでは無かったものの、散歩には十分な広さの庭があった。そしてファールリユーラとオーヴィスが甚く気に入った、小さな美しい池もあった。

“ファールリユーラ……”

ファールリユーラ……”

しつとりとした優しい声に呼ばれ、ファールリユーラは池の中を覗き込んだ。池の表面がさざ波だっている。

「こんにちは、水の貴婦人方」

ファールリユーラは、微笑み挨拶をする。

“眠る者が目覚めそうだ、ファールリユーラ……”

「え？」

意味が分からなかった。

“大地の紳士方に尋ねてご覧なさい”

“彼等の方が詳しい筈だから．．．”

“気をお付けなさい、ファールリユーラ”

“気をお付けなさい、ファールリユーラ”

ファールリユーラはふと不安になる。水の貴婦人達の言葉の意味は良く分からなかったにも拘らず．．．。

「眠っている者って、大地の紳士方では無いの？」

“違う、ファールリユーラ．．．”

“目覚めさせてはいけない者だよ．．．”

”

「目覚めさせてはいけない者．．．」

“そう、この世界にあつてはならない者”

“大地の紳士方に尋ねてご覧なさい、ファールリ

ユーラ”

(大地の紳士方か．．．、彼等は起こすのが一苦労だわ．．．
．．．、いつも眠っているから．．．)

ファールリユーラは肩を竦めた。竦めながらも、ファールリユーラは

大地の紳士方

土の精霊達

を探しながら歩いた。

(目覚めさせてはいけない者．．．？何だろう．．．)
ファールリユーラは、少し不安な気持ちになりながら、幾度か大地の紳士方と呼んでみた。だが返事は無い。きっと地中深くでごろごろしているのだろう。大地の紳士方は、他の精霊達と違って酷く人見知りをするのだ。ファールリユーラの前にも、気が向かないと出て来てはくれない。ファールリユーラはもう一度肩を竦めた。

誰かがすぐ近くで、くすくすくすつと笑った。いつもお茶目で悪戯好きな風の娘達だ。

“蒼い瞳のあの人が帰って来たわ、フアーリユーラ”

“今、馬から飛び降りたわ、フアーリユーラ”

フアーリユーラの顔が、ぱつと笑顔に変わった。両手で長いスカート裾をたくし上げると、大急ぎで屋敷に戻ろうと駆け出した。風の娘達が皆、いつもの様にやんやと囃し立てながら付いて来た。屋敷から庭園へと石段を下りて来る黒髪の人影が見える。フアーリユーラはその人物に向かって一目散に駆け、そして勢い良く抱き着いた。すらりとした長身の黒髪の青年は、爽やかな声で笑いながら愛する妻を抱きとめ、そしてその艶やかな唇に口付けを落とした。

「お戻りなされませ。今日は早かったのね、旦那様」

「ああ、貴女が恋しくて城を飛び出して来てしまったんだ、私の姫君」

「まあ……」

フアーリユーラは夫の首に両腕を回したまま、嬉しそうに笑った。オーヴィスはそんな妻の表情に、幸せそうに目を細めると、今一度その唇を塞いだ。

「一つ、良い話があるんだ、フアーリユーラ」

フアーリユーラと腕を組んでゆっくりと歩きながらオーヴィスは言った。

「良い話？」

フアーリユーラは琥珀色の瞳を輝かせ、優しく微笑む夫の顔を見上げた。

「サラードル殿下が明日中には王都にお戻りになられるそうだ」

「叔父上様が？」

オーヴィスは頷いた。

「ご予定よりも5日程早くお着きになられるそうだ」

「まあ」

父王の双子の弟であるサラードル王子に会ったのは、もう十年程も前の事であった。父が二人いると思つてしまつた程に父に似ていた叔父は、ファーリユーラの青味を帯びた銀色のこの髪を褒めてくれた。相変わらずお父様と同じ顔をしていらつしやるかしら……。ファーリユーラはそんな事を考え、くすりと小さく笑つた。

ファーリユーラは今朝も庭を歩き回つていた。大地の精霊達を探してつろつろと歩き回つた。水の精霊達の意味の分からぬ言葉を聞いてから、何やら心に引つかり、大地の精霊達に詳しくを尋ねたくて探すのだが、精霊達の中でも特に気紛れな彼等は現れてはくれない。

「眠る者が目覚めそうだ……」

ファーリユーラは、あの時の水の精霊達の言葉を反芻してみた。

眠る者……。眠る者……。?

ファーリユーラは酷く嫌な気持ちになつた。酷く恐ろしい……。

空が酷く暗くなつた。恐ろしい程の早さで暗雲が垂れ籠めた。

おかしい……。ファーリユーラは咄嗟に思う。尋常ではない……!

大地が大きく揺れたかと思うと、足元に亀裂が走つた。一瞬にして足場を失い、ファーリユーラは助けを求めて夫の名を絶叫した。

強く抱き締められ、名を呼ばれている事に気付くまでにどれだけ

の時がかかったのか、ファールリユーラには分からなかった。

「私はここにいるよ、ファールリユーラ！ファールリユーラ！」

夫の声が漸く耳に届く。自分が酷く震えている事に気付く。夫の背に血が滲む程に爪を立ててしがみついていた事にも気付く。

「悪い夢を見たんだね？」

「夢．．．．．」

オーヴィスに抱えられたまま、ファールリユーラは大きく震える息をつく。

「夢だったのね．．．．．」

「夢だよ、ファールリユーラ」

暗闇の中、オーヴィスはファールリユーラを安心させるかのように、額にそつと口付けを落とした。そして彼女が再び眠りに就くまで、オーヴィスは他愛も無い笑い話を語ってやった。

つい先日もこんな事があった．．．．．。オーヴィスは自分の腕の中で、再び静かな寝息を立て始めた妻の絹糸の様な髪を弄びながら考える。妻が神秘の能力ちからに恵まれている事を、彼は知っていた。神殿の巫女などには、夢で物事の予兆を見ると聞いた事があった。

「そんな物でなければ良いが．．．．．」

オーヴィスはぼつりと呟いた。

3・ターロの君とファールリユーラ 2

十年ぶりに弟の姿を目の前にしてのアガダル王の第一声は、“相変わらず同じ顔だな”、であった。そう言って機嫌良く笑う兄王の姿に、王弟サラードルは苦笑し、その息子ジャスウィンドは、まじまじと見入った。顔貌かおかたちは元より、髪の色も瞳の色も、体型も、背の高ささえも、鏡に映したかの様にそっくりな伯父に、ジャスウィンドは子供らしく素直に驚きの表情を浮かべていた。何も驚いたのは彼だけでは無かった。王弟サラードルとその息子を出迎えた王の子供等も又、一様に目を丸くして、父王の顔と叔父の顔を幾度も幾度も見比べたのであった。

帰還したサラードルは、久方ぶりの王宮内をゆるりと見渡した。己の生まれ育った城であるというのに、懐かしい思いこそすれ、己の有るべき処だとはやはり思えなかった。

あの、気が狂うかと思えた程の焦燥が、憎悪が、苦しみが、未だ悲しい痛みとなって胸の奥くもに燻る。気が狂うかと思う程に恋焦がれ、それ故、殺したい程に憎悪した、あの氷の様に美しかった姉はもういないのだと、サラードルは自分自身に言い聞かせる。

東の有力部族の血を引く王妃と、正式に王太子として立てられたという兄王の長男である甥、そしてその下の幼い甥や姪達、又、他の王族の面々に再会、もしくは初めて対面し、サラードルは時代の流れを実感する。時は確実に流れたのだと……。そして最後に、良人おとこに手を引かれながらひっそりと歩み出て来た兄王の庶出の長子・

．．．、その銀の姫君の目も眩む程の美しさに、サラードルは息が止まるかという程の驚愕を隠す事が出来なかった。

「クウインディラ．．．．．」
無意識の内に、溜息のような声の一つの名を紡いでいた。

フアーリユーラは、久方ぶりに会う叔父の眩きとその様子に戸惑い、オーヴィスは訝しみ、アガダル王は笑顔のまま弟王子の肩に手を乗せた。

「上の娘だ、サラ」

王は、弟を正気付かせようともするかの様に、その肩を軽く揺すった。

「フアーリユーラです、叔父上様。ようこそお戻り下されました」
輝く様な笑顔で言うのと、フアーリユーラは深々と膝を折って頭を下げた。見事な銀の髪がさらさらと流れた。

サラードルは我に返った。

「フアーリユーラか．．．．．、あの銀の髪ของフアーリユーラか、
．．．．．美しくなったものだな．．．．．」

サラードルは目を細め、姪の笑顔を眺めた。

（ああ．．．．．、クウインディラはこんな笑顔を見せた事は無かった．．．．．、そうだ、只の一度も無かった．．．．．）

巫女の表情をしたクウインディラの顔が、目の前の娘の顔に重なる。

（クウインディラは．．．．．そうだった．．．クウインディラの瞳は、深い色をしていた．．．．．そうだ、深い．．．総てを見透かすかのような紺碧の色をしていた。その実、何も映しはしない瞳だった．．．．．。この娘の様な、生き生きとした琥珀の輝く瞳では無かった．．．．．）

総てが甦る。クウインディラの表情の無い眼差しが、あの青味を

帯びた見事な銀の髪の手触りが、あの白い肌が、あの感情の無い巫女の声が……、まるで昨日の事の様にもまざるとサライドルの中で甦る。殺したい程に焦がれた血を分けた姉。サラードルは、最後に目にした姉姫の静かな涙を思い出す。いや、あれは最初で最後の、己が目にしたクウインディアの涙であったと彼は思い直す。焦がれ、憎み、愛した。否、未だに愛していた。サラードルは未だに呪縛に囚われたままだったのである。

「驚いたか？ 似ていただろう？」

人目の無くなった時に、兄王は弟に言った。微笑んではいたが、その瞳は笑ってはいなかった。

「似ているなんてものじゃ無いだろう？ 兄者よ……」
。 生き写しだ」

サラードルの押し殺した様な声に、アガダル王は微笑んだまま答ええない。ふいに恐ろしい思いに取り憑かれ、サラードルは思わず兄の腕を掴んでいた。

「あれは真、お前の娘か？ 兄者？」

「何が言いたいのだ？ サラードル」

「クウインディアの娘では無いのか？」

その声は掠れ、いや声にさえなっていない囁きであった。

「大巫女であった姉上が、禁を犯したとでも言いたいのか？子を孕み産み落としたとでも言いたいのか？」

鋭い憤怒の囁きと共に、アガダルはサラードルを睨め付けた。その瞳には一瞬、確かに憎しみが浮かび、そして消えた。王は、弟から目を逸らし、フツと再び笑みを浮かべた。

「姪が伯母に似るは良くある事であろう。ファールビューラは真、私の娘だ」

アガダル王は微笑んではいたが、サラードルへと向けた瞳は、やはり笑ってはいなかった。

王弟の帰還を祝つての宴の最中、しきりに寄つて来る貴族等豪族等へ、適当な言葉を返しながらもサラードルの目は、気付けば兄王の庶出の娘を追っていた。

母親は確か村娘であったか……。サラードルは杯を傾けながら、思い起こす。そして傍らの兄王へと目を向ける。あの銀の姫の母親に興味が湧いた。

「何だ？」

双子の弟の視線を受け止めるや、兄王は朗らかに尋ねた。

「うむ……」

サラードルは言い淀みつつ王妃へと素早く目を走らせ、貴族の夫人等と何やら楽し気に語り合っている姿を確かめると、口を開いた。

「あの銀の姫の母親とは、どんな娘だったんだ？兄者」

アガダルは弟と同じ琥珀色の瞳を軽く見張ったが、次の瞬間には瞳を細め微笑んでいた。

「今更、気になるのか？」

「兄者が惚れた娘だったのだろう？」

「十年前に再会した折は、フアーリユーラの母の事など、微塵の興味も示さなかったであろうに」

「……そうだな……」

素直に同意するサラードルに、アガダルは軽く息を吐く。この弟が今、何を思い何を考え、そして何を疑っているかなど分かっていた。アガダルは、弟から視線を逸らした。

「もの静かで、美しく、不幸な娘だったよ……、サラ」

それを聞いたサラードルが、どのような表情をしたかは、アガダルには分からなかった。

ジャスウィンドが、親指と人差し指を口に銜え思いきり吹くと、曇り空に軽快な指笛が鳴り響いた。風の比較的穏やかな昼下がりの事であった。間も無くして、空を飛来する美しい姿が現れた。

「あ、来たわ」

ジャスウィンドの傍らで空を見上げていた美しい従姉は、嬉しそうな笑顔を少年に向けた。この年上の従姉の屈託の無い表情に、ジャスウィンドも又嬉しくなる。

先日、生まれて初めて会って言葉を交わした時、ジャスウィンドはこの従姉のあまりに見事な青味を帯びた銀の髪と、その美貌にどきまぎとしたが、そんな事よりも彼女を取り巻く空気のアマリの心地良さに吃驚してしまった。きっと沢山の神々に愛されているに違いないと思った。

（だって、まるで婆様達の傍にいるみたいだもの……、ううん、それ以上だもの……）

鳥達や獣達の言葉を解する特殊な能力を持つジャスウィンドは、故郷の呪い婆とその弟子達に随分と可愛がられた。それ故、少年は良く知っていた、その彼女達の周りを包む空気という物を……。

『婆達の呪いはな、この大地の様々な神々のお力なのじゃよ。地、空、風、花、木、河、炎……、おお、とてもとても総ての神々の名を言えせん。あまりに多過ぎてな。あらゆる物に神は宿っておられるのじゃよ。その神々に厭われては呪い師にはなれぬのじゃよ、ジャスウィンド』

呪い婆は、ジャスウィンドにそう教えてくれた。

隼ターロは、何とも優雅に友である少年の革製の籠手に被われた腕に舞い降りた。

「僕の従姉殿だよ、ターロ」

“ふむ”

隼は、まるで値踏みするかの様に友の従姉だという姫君をじっと見た。

“我は空の王者ターロだ、よしなに”

「お前、態度がでかいぞ」

ジャスウィンドがターロを咎めると、傍らの従姉がくすつと笑った。

「わたくしはフェアリユース、どうぞよしなに、空の王者ターロの君よ」

ジャスウィンドは驚き、長いスカートをつまみ上げて礼儀正しく膝を折り頭を下げる美しい従姉をまじまじと見る。ターロは実に満足げに一声啼いた。

「ターロの言う事が、ひょっとして分かるの？ フェアリユース？」

銀の姫君は茶目つ気たつぷりに微笑んだ。金色の瞳が自分と同じ色をしている事に、少年は初めて気付いた。

「内緒にして頂戴、お願い、王子様」

フェアリユースは少年を伺い見る様に、小首を傾げながら口の前で両手を合わせた。

「うん、いいけど・・・」

「でも、国王陛下とシャドスとレティと、あと私の良人は知っているの」

フェアリユースは少女の様にクスッと笑った。

この従姉の良人がオーヴィスである事をジャスウィンドは知っている。オーヴィスはよく少年に剣の稽古をつけてくれたし、少年の遊び相手をしてくれた。それ故、彼の帰国が決まった時、少年は実に残念がったものであったが・・・、成る程・・・と、ジ

ヤスウィンドは思った。オーヴィスはこの美しい従姉と結婚する為にロセアニアに戻ったのかと、少年は勝手に解釈したのだ。

「何て美しい翼なのかしら……、ねえター口の君、触っても良くて?」

“うむ、特別に許す、銀の姫よ”

「やれやれ」

ジャスウィンドは友の尊大な物言いに呆れ、溜息を洩らした。フェアリユーラは嬉しそうにター口の翼を撫でている。

「全く素直じゃないなあ、お前は。嬉しいならもっと嬉しそうにすればいいのに、気取っちゃって」

ター口は少年の言葉に無視を決め込む。フェアリユーラはくすくすと楽しそうに笑った。

“お前は口が悪いジャスウィンド、少しは姫君を見習え”

「ちえっ、説教かよ」

“おや、客人だ”

「ん?」

ジャスウィンドがター口の示す方を振り返ると、向こうの植え込みの影からこちらを伺う人物と目がかち合った。相手が慌てた様に踵を返した。

「あつ、ちよっと待って」

ジャスウィンドは駆け出した。ター口が不満げな声と共に空に羽撃く。

「待てったらアルレイっ!」

一目散に駆けて行く従弟の姿に、フェアリユーラは目を丸くするも、ター口が近くの木の枝に羽を休めると肩を竦めて微笑みかけた。

3・ターロの君とファールリユーラ 3

「王太子様だわ、私の弟よ」
年若い従弟が弟の腕を捉える様子を眺めながら、ファールリユーラはターロの君に告げた。

“ほお？”
相槌を返すターロの君は、然程の興味を持った様には見えなかった。

ジャスウィンドが自分よりも背の高いひよろりと痩せた少年の手を引いて戻って来ると、ファールリユーラも彼等に歩み寄った。

「こんにちは、王太子様」

姉の笑顔に王太子は少し頬を赤らめた。

「あ．．、姉上にはご機嫌麗しく．．．」

王太子は礼儀正しい挨拶を口にする。

「ありがとう、アルレイ王子」

どぎまぎしているアルレイをジャスウィンドが突つ突く。

「何堅くなってるの？ 君の姉上だろ？ 今、君の姉上に僕の友を紹介していたんだ。君にも紹介するよ、アルレイ」

ジャスウィンドが腕を上げると、ターロが飛んで来た。

「ターロっていうんだ」

アルレイは少し戸惑っているようであった。

「空の王者なのよ。ご挨拶してごらんなさいな、アルレイ王子。」

ターロの君はきつと貴方の言葉を理解するわ」

ファールリユーラの笑顔と優しい声にアルレイは数度瞬くと、ジャスウィンドの腕の隼に目を移す。

「空の王者．．．、ふうん．．．、立派な隼だな」
アルレイが呟く。

“そんな事は知っている。挨拶に名乗らぬとは礼儀を知らぬのか？”

ターロは中々に手厳しい。幸いターロの言葉はアルレイには通じなかったが．．．．。

「褒めてくれてありがとうだつて。君の名前を知りたがつてるよ」
ジャスウィンドが角の立たぬ通訳をすると、ファールリユーラは楽しそうに微笑んだ。

「私か？ 私はアルレイだ、宜しく頼む、空の王者」

“うむ、良いだろう”

「あははっ！ターロの奴、ご機嫌だよ、アルレイ。彼は空の王者
って呼ばれるのが大好きなんだ」

「ふうん、そうなのか？」

アルレイははにかみつつも笑みを見せた。

「これから暫くはお二人で共に勉学をなさるのですってね？
アルレイ王子」

「はあ．．．」

姉の問いにアルレイは曖昧に頷いた。

「ジャスウィンドは王国語も達人だし、私と年もそう変わらない
から、ちょうど良いだろうと父上が仰るので．．．」

おつとりと話す王太子の言葉にジャスウィンドは唇を突き出した。

「何だか、仕方が無いって素振りだな、アルレイ」

「別にそんな事は無いよ」

アルレイはジャスウィンドに微笑んでみせる。

「博士達の退屈な授業も、やかましい君が一緒だと眠くならなくて助かるよ、今の処はね」

アルレイの言葉にファールリユーラは思わず笑い声を上げ、ジャスウィンドは何やら複雑な面持ちになった。ふと、その時、突如強い風が彼等に吹き付けた。

「フアーリユーラ！ 大変よ！」

風の娘の声であった。

“眠れる者達が目を覚ます！”

“眠れる者達が目を覚ますわ！”

風の娘達の緊張を緊張を孕んだ声に、フアーリユーラは俄に緊張する。先日、水の精霊達も似た様な事をフアーリユーラに訴えた。フアーリユーラを不安が襲った。

「フアーリユーラ？」

ジャスウィンドも何かを感じとったのだろう、表情を僅かに曇らせていた。

「何でもないわ、従弟殿」

フアーリユーラは明るく微笑んだ。

少年達と別れ王城を辞して自宅へ戻ると、客人が訪れていた。良人には無かった。フアーリユーラにであった。神殿からの使者と聞き、フアーリユーラは早急に己の居間へと通させると待たせた事を鄭重に詫びた。客人は二人であった。二人共深々とベールを被っていたので顔立ちは分からなかったものの、一人は年老いており、もう一人は中年といった年頃であろうか。年老いた方がベールをはぐりフアーリユーラにその顔立ちを現した。

「あ．．．．．」

フアーリユーラは思わず息を呑み、咄嗟に跪いた。

「ご連絡下さればこちらから出向きましたのに．．．、大巫女様」

神殿の長である大巫女自らの忍びの訪れにフアーリユーラは驚き恐縮した。

「いいえ、大事有りませなんだ、姫様^{ひいさま}。此度は姫様^{ひいさま}に大事なお話あつて出向いて参つたのです」

「大巫女様御自らお出ましになられるなんて、余程に大切なお話なのですね？」

「如何にも」

老齡の大巫女は、重々しく頷いた。

「フアーリユーラ」

帰宅したオーヴィスが居間に妻の姿を見出した時、彼女は何やら難しい表情で窓の外へと琥珀色の眼を向けていた。

「フアーリユーラ？」

声をかけても全く反応を示さない妻を案じつつ、オーヴィスは歩み寄るとその頬に軽く口付けた。

「オーヴィス！」

飛び上がって驚く愛らしい妻の細い身体を、オーヴィスは笑いながら抱き締めた。

「びっくりしたわ、足音を忍ばせてくるなんて、オーヴィスつたら」

オーヴィスの腕の中に大人しく収まりながら、フアーリユーラは拗ねた声で文句を言う。足音を忍ばせた覚えなど全く無かったものの、オーヴィスは否定もせず拗ねる妻に詫びながら、その滑らかな額に優しく口付けを落とす。

「さつきは、何を考えていたのだい？ 私の姫君」

「えっ？」

「随分と熱心に考え事をしていた様だったけれども？」

良人の腕の中でファールリユーラは一瞬瞳を見開き、そして甘えるようにその胸に頬を擦り付けた。

「色々よ。貴方の事やお父様の事、それから従弟殿の事とか、叔父様の事。それに王太子殿下の事。それから．．．．．、それから、お母様の事とか．．．．．」

「悩み事や、心配事なら、隠さずに話しておくれ、愛しい人」

「あら、そんなのじゃ無いわ」

ファールリユーラは良人を見上げて屈託ない笑顔を見せた。オーヴイスはそんな妻の輝く髪をそつと撫でると、その瑞々しい唇にそつと触れその甘さを確かめると、やがて深く唇を重ねた。

オーヴイスは、一昨日からの妻の様子が少しおかしい事に気付いていた。何となく沈んでおり、心ここに有らずといった状態で、何かを考え込んでいるのである。家人に尋ねると、一昨日神殿からの客人があつたとの事。オーヴイスは内心案じていた。妻の公にはされていない神秘の能力ちからの事と、この処彼女が頻繁に悪夢にうなされてる事に．．．．．。彼女が沈み考え込んでいるのは、それが原因なのだろうとオーヴイスは案じていた。

その時突如、地が揺れた。

「！」

オーヴイスは息を呑み、ファールリユーラは小さな悲鳴を上げ良人にしがみついた。表から風の娘達の叫ぶ声が聴こえて来た。

「眠れる者．．．．．、眠れる者達が．．．．．、眼を覚ます．．．．．」

ファールリユーラは無意識の内に呟くと、オーヴイスの腕の中で震えながら気を失った。

垂れ籠める灰色の雲の下で翼は弧を描く。暗海に吹く海風は何時でも強く、冷たく、そして禍々しい。彼は友に連なりこの石の都へ来てからすでに、幾度となくこの暗海へと飛んで来ては白亜の神殿の上空で弧を描いた。そして、神殿へと降下して行った。

純白の聖衣姿に毛織りのシヨールを巻き付けた老婆が、断崖に面した崖から密やかに現れ、ゆっくりと石段際まで歩を進めて来た。手摺に灰黒色の羽を休める見事な隼の姿に気付くと目を細める。本来警戒心の強い筈の隼はしかし、老婆が近付いても身動き一つしなかった。

「おや？又来ていたのかえ？一体どなたの隼なのだ？お前程の立派な隼だ、さぞ一角のお人の物なのだろう……」

“ 我は誰の物でもない ”

「 そうかえ…… 」

人語を解する隼に驚く事も無く、老婆は平然とその言葉を理解し相槌を打った。そしてすぐに興味を失った態で暗く広がる海を見渡す。

「 不吉じゃ…… 」

老婆は呟きと共に大きな溜息を吐いた。

“ この地に封じられた魔物が暴れているようだな ”

その言葉に老婆は首を巡らせ隼を見た。

「 ほう、お前に分かるのか？隼よ 」

“ 永きに渡り自由を奪われた魔物は大層な怒り様だ。綻びの激し

い封印など、もはや破れるのも時間の問題”

「左様、このままでは時間の問題じゃ…………。だが、あの銀の姫ならば…………。」

“ふむ…………。”

突然地が揺れ、隼は飛び立った。老婆は微かによるめき手摺につかまった。

「またじゃ、魔物が暴れておる…………、また封印が綻びる」
やがて揺れが収まると、老婆は封印を繕う儀式の為に神殿へと戻って行った。

「また、地震だっ！」

突然ぐらりと揺れ出した地面に、馬が落ち着きを無くし嘶いた。

「ロセアニアがこんなに地震の多いところだとは思わなかったよ、アルレイ」

ジャスウィンドは自分の馬を宥めながら、傍らでやはり同じく乗馬を宥めようとしている従兄弟を振り返った。

「以前は、地震なんて殆ど無かったんだ。ここ最近だよ、こんなに地震が起きる様になったのは。もしかしたら地中の魔物が目覚めて暴れているのかもしれない」

「地中の魔物？」

「うん」

頷くとアルレイは小高い丘の上から遠くを見渡しながらそちらを指し示した。

「ここをずっと行くと暗海に出る。その暗海を見下ろす断崖の上に大神殿があるんだ。その大神殿の建っている地の奥底に魔物達が封印されているんだ。遠い昔に僕等の先祖が封印した魔物達だよ」

「それって、危なく無いのか？」

「危ないよ。封印が破れたらきつと恐ろしい事になる。このロセアニアはきつと終わりだ」

表情を曇らせるアルレイの言葉に、ジャスウィンドは恐ろし気に息を呑む。

「そんな……」

ジャスウィンドは声を震わせた。するとアルレイは、こらえきれずに急に笑い出した。

「なっ!?!」

「あはははっ!今の君の顔ったら!」

「何だよっ!?!騙したのか?」

「魔物の話は本当だよ。でも封印は神殿の大巫女様達がか守っているから大丈夫だよ」

ジャスウィンドがぶつぶつと文句を言いながらもホッと胸を撫で下ろすと、アルレイは笑いながら馬を走らせた。

「あっ!待てよ、アルレイっ」

「嫌だね。姉上の屋敷まで競争しよう、ジャスウィンド!」

「ようし!絶対に追い抜いてやる!」

少年達が楽し気な声を上げながら馬を駆けさせ始めると、数人の供の者達もそれを追って馬を走らせ始めた。

王太子アルレイと王弟の息子であるジャスウィンドは、歳が近い事もあってか、あつという間に打ち解け、学ぶにも遊ぶにも共に行動する事が多くなっていった。今日もこうして遠乗りに出掛けて来たわけだが、その帰りにフリーリユーラ姫に会いに行く事で二人の意見は一致していた。すっかりフリーリユーラ姫と仲の良くなった二人は、近頃では彼女の屋敷を尋ねる事も多かつたのだ。

気さくな気質の姫は、宮廷から離され養育された為なのか、儀礼や作法といった事に拘る事が無く、少年達が前触れも無く訪れようとも、何時でもその訪れを心から喜び迎えてくれるのだ。

軽やかな羽撃きの音に、庭園の瀟洒なベンチに腰掛けていたファ
ーリユーラははつと顔を上げた。傍らに、ベンチの背もたれに停ま
る隼の姿があった。背の灰黒色に対し、胸は純白に横斑の入った見
事な隼である。

「あら．．．、ごきげんよう、ターロの君」

「ファーリユーラはぎこちなく微笑んだ。

“何を思い悩んでおるのだ？銀の姫よ”

「あ．．．」

隼の鋭い観察眼に、ファーリユーラは戸惑い口ごもる。

“地底に封じられし魔物の事か？”

「ずばり言い当てられて、ファーリユーラは軽い驚きに息を吐く。

「貴方は何でもお見通しなのね、ターロの君」

“別にそういうわけでは無い。感が鋭いというだけの事だ”

「地底の魔物の事を知っているのね？」

“ああ。神殿の大巫女がお前を必要としている事も知っている、

銀の姫よ”

「ファーリユーラは溜息と共に自分の両手を見下ろした。

“目覚めた魔物等は地底で怒り狂っている。封印の綻びは酷くな
る一方だ。そして地底の最も奥深くに眠る者が目覚めれば．．．．

．．．”

ターロの言葉にファーリユーラはゾクリと身を震わせた。先日忍
びで訪れて来た大巫女の言葉。あの日から胸の内に繰り返す甦って
はファーリユーラを悩ませている言葉が、今一度甦る。

『姫様の、そのお能力は、現し身のどの巫よりもお強い。神殿に
お上がり下されませ。封ぜられし悪しき者が、今にも目覚めんとし

ておりまする。姫様のお能力無くして、このロセアニアの存続はありえますまい」

「大巫女様が仰つたの．．．．．」
おずおずと口を開くファールリユーラに、ター口は先を促すかの様に首をわずかに傾げた。

「私の能力無くして、ロセアニアの存続はありえないだろうって．．．．．」
「ふむ．．．、それを信じたく無いが為に、思い悩んでおるのか？姫よ？」

ター口の言葉にファールリユーラは項垂れた。
「．．．．．神殿など行きたくはないわ．．．．．行きたくないけれど、．．．．．でも．．．．．」

ファールリユーラは苦悩に歪んだ表情を両手で覆い隠した。
「どうしたら良いの？ター口の君、私はどうしたら．．．．．？」
“思い悩むのも無理は無かるう。だが我には何も言えない。どうすべきかを決めるは、お前自身だ。ただ、お前自身にとって何が一番大切かを考えてみれば、おのずと取るべき道は決まるのではないか？銀の姫よ”

「何が、一番大切かを．．．．．？」
顔を上げたファールリユーラが呟いた時、館の方からファールリユーラの名を呼ぶ乳母の声が聞こえて来た。続いて少年達の元気な声が聞こえて来たかと思うと、身軽な少年達が館から飛び出してこちらに駆けて来る様子が見えた。

楽しそうにふざけあい競いあいながら、少年達はファールリユーラの元まで飛ぶ様に駆けて来る。その微笑ましい少年達に、ファールリユーラは一瞬思い悩んでいた事を忘れる。

「こんにちは、アルレイ王子、ジャスウィンド王子」
立ち上がり二人を迎えるファールリユーラの笑顔に、ジャスウィン

ドモアルレイも嬉しくなる。

「お前ここにいたのか、ターロ!? 姿が見えないと思ったら、自分だけさつさとファアリューラの処に来てるなんて!」

ファアリューラの傍らのターロの姿に、ジャスウィンドは半ば呆れながら口を尖らせた。

“悪いか? 友よ”

「別に悪く無いけど、ずるいつ」

「まあいいじゃないか、ジャスウィンド」

今ではジャスウィンドの特殊な能力を知るアルレイが、従兄弟の肩をぽんぽんと軽く叩きながら宥める。

“お前は王太子の寛容さを少し見習え、ジャスウィンド”

「ちえ〜っ」

「何?」

ターロの言葉を理解出来ないアルレイが目を丸くして尋ねる。

「君の寛容さを少し見習えだつて」

極り悪気な従兄弟の言葉にアルレイは笑い出す。ファアリューラも思わずくすつと笑いを零し、それを取り繕うかの様にコホンと小さな咳を零す。

「二人ともお茶にしましょう。きつとレティが仕度をしてくれるわ、おいしいお菓子と一緒に。行きましょう」

少年達は嬉しそうな歓声を上げた。

一番大切なもの……。ターロの助言がファアリューラの脳裡を過る。大切なものなら沢山あると思った。ファアリューラは大切なものを思い浮かべ内心で指折り数えてみる。指を七本程折って数えた処で、ファアリューラは気付く。それは大切な“もの”ではなく、“者”。大切な人々であった。

父であるアガダル王、良人であるオーヴィス、それにレティやシヤドス、叔父であるサラードル王子、勿論今目の前にいる少年達。

それから．．．．、精霊達．．．。いつもまとわりついて来る風の娘達、気紛れだが心強い味方である炎の貴公子達、品の良い水の貴婦人達、人見知りな大地の紳士達．．．．。

己にとり一番大切な．．．．。ファールリユーラは、そこで又思い悩む。誰もがファールリユーラにとっては大切なのだ。一人を選ぶなど、酷であった。オーヴィスの整った容貌が脳裡を占めたが、彼を愛する程に父王をも愛していた。そしてその他の面々も。愛情の質は違えども、皆がファールリユーラにとっては失いたく無い人々であったのだ。

3・ターロの君とファイリユーラ 5

大切な……。。。

ファイリユーラは庭を彷徨い歩き、やがて小さな池のほとりまで来ると、ゆるりとかがみ込んで池の水面へと視線を泳がせた。時折風の娘達が、その水面を悪戯みなもに騁り行き来する。

ファイリユーラは思い悩む。もう幾日も、こうして思い悩んでいるのだ。そんな自分を案じてくれるオーヴィスの心を感じる度に、ファイリユーラは泣きたくなった。

“ファイリユーラ……。”

“ファイリユーラ……。”

しつとりとした声に名を呼ばれた。

「水の貴婦人方……。」

“神秘ちからの能力に恵まれし娘よ……。”

“随分ちかと思ひ悩んでいるようですね……。”

「ええ……。」

ファイリユーラが沈んだ声音で頷くと、地面の息吹が聞こえて来た。

“ファイリユーラよ……。”

”

“あまり時間は無いのだ、ファールリユーラよ．．．．

「大地の紳士方！」

いつもは、どんなに呼んでも中々出て来てはくれない大地の精霊が、今日は自分達の方から出向いて来た事に、ファールリユーラは少なからず驚いた。

“異質な者が目覚めようとしておる．．．．”

“その眷属達は、すでに目覚め地中で暴れ、我らの眠りを妨げる．．．．”

“目覚めさせてはならぬ者．．．．”

“人間とも、我々精霊とも、相容れる事の出来ぬ者．．．．”

「私に．．．．、何が出来ると言うの？」

ファールリユーラは震える声で大地の精霊達に問いかけた。

“お前程の能力ちからに恵まれた者は、他にはおらぬ．．．．”

「怖いわ．．．．」

“哀れなファールリユーラ．．．．”

“愛するファールリユーラ．．．．”

小池がさざ波だった。水の精霊達の声は、しっとりと優しく、そして微かに哀れみの音が混じる。

“私達は、何時でも貴女の味方となりましょう．．．．”

“ 貴女を助けると約束しましょう、ファールリユーラ . . . ”

“ クウインディラの血を受け継ぎし娘よ . . . ”

“ クウインディラちからの能力を受け継ぎし娘よ . . . ”

「 水の貴婦人方 . . . 」

“ 我らも、お前を助けると約束しよう、ファールリユーラよ . . . ”

“ クウインディラの娘よ、約束しよう . . . ”

“ クウインディラの娘よ . . . 、我らの愛し子よ . . . ”

“ 約束しよう . . . 、約束しよう . . . ”

「 えっ!?! 」

大地の精霊の言葉に、ファールリユーラは思わず驚きの声を上げた。だが、咄嗟に言葉が出なかった。それを知ってか、精霊達はそのまま去って行く気配を漂わせた。

「 まっ、待ってっ! 大地の紳土方! 今のはどういう意味なの? 」

ファールリユーラが両手を付いて大地へ向かって叫ぶも、精霊達は最早言葉を返してはくれなかった。小池へ視線を馳せてみても、同様に水の精霊達も去ってしまった。

「 クウインディラ伯母上様の . . . 」

ファールリユーラが生まれて間も無く、病の為に身まかつた前さきの大巫女であったファールリユーラの伯母姫。父王とサラードル王子の異腹の姉姫。その早世した巫女姫の . . . ? 大地の精霊は何と

言った？

「伯母上様の．．．、娘．．．．？ どういう事．．．．？」

フェアリユーラは混乱した。再会した時の、叔父の酷く衝撃を受けた様な表情が脳裡を過った。叔父はフェアリユーラの顔を凝視し、確かに伯母の名を呟いた。

「姪が伯母に似るのは、良くある事よ。似ているから、きっと“娘” って．．．。大地の紳士方はそう呼んだのよ」

地べたに座り込んだまま、フェアリユーラは己に言い聞かせるかの様に独りごちた。

「奥方様、まあ、奥方様っ！？ 如何されたのです？」

地べたに座り込んでいるフェアリユーラの姿を目に止めたレティが、両手でスカートをつまみ上げながら小走りに駆け寄って来た。

「何でもないわ、乳母や、少し考え事をしていただけよ」

「こんな処に座り込んでございますか？」

立ち上がるフェアリユーラのドレスの汚れをはらってやりながら、乳母レティは心配そうな瞳を乳母子へと向ける。

「私はずきり御気分でもお悪いのかと思いましたが、フェアリユーラ様」

「ごめんなさい、びっくりさせて。でも、本当に何でもないわ」
フェアリユーラは微笑む。

「ならば良いのですが．．．．」

「ねえ、乳母や」

「はい？ 奥方様」

「私は、クウィンディラ伯母上様に似ているのでしょうか？」

「ええ、似ておられますよ」

「何処が似ているの？ どれ位似ているの？」

「そつでございますねえ、御髪おみげの色にお顔立おでこちは、よう似ておら

れますよ。巫女姫様も、それはそれは美しい姫君であられましたから。でも、奥方様のようなお転婆姫では有らせられませんでしたけれどね」

「んもう、乳母やったら」

レティにからかわれ、フェアリユーラは微かに頬を染めた。裸足で駆け回り、大木の高みまで登っては、レティをはらはらさせたお転婆姫も、エディンヴァル家に降嫁しオーヴィスの妻となつてからは、大分しとやかになった。

「フェアリユーラ様が木登りから卒業して下さつて、この乳母やの寿命がどれ程伸びた事か……」

大仰に胸を撫で下ろす仕草をするレティに、フェアリユーラは思わずくすつと笑い出す。

「もう、嫌な乳母やね」

笑いながらも口を尖らせるフェアリユーラに、レティもくすくすと笑い声を上げた。

翌日の昼下がり、フェアリユーラは王城へと出掛けた。週に一度は娘を訪なっていたアガダル王も、娘を降嫁させてからは、新婚夫婦への気遣いなのか、その訪ないもめつきり減つた。その代わりに、王都に暮らす様になつてからは、フェアリユーラの方から父王を尋ねる機会が多くなつた。嫁ぐ前はあれ程に王城から離されて育てられたというのに、嫁いでは、王も愛娘を頻繁に城へ呼び寄せる様になつた。神殿が執拗に欲しがつた娘も、既に嫁が世人のものとなつた。その安堵が王の心にはあつたのだ。

フェアリユーラはその日、父王に目通りを願う前に城内のある部屋を覗いた。壁には処狭しと絵画が並んでいた。代々の国王の

肖像から、王族の面々の肖像画。ファールリユーラはそれら一つ一つを眺めつつ、ゆっくりと歩を進めた。そして然程大きくも無い、あの若い少女の肖像画の前で足を止めた。

歳の頃は四、五歳といった処か……、銀色の直毛に、蒼い瞳。微かな笑みを小さな口元に上げていた。早世した、ファールリユーラの伯母の唯一の肖像画であった。

年端もいかぬ幼い少女の姿でありながら、不思議な程に大人びた印象を受ける微かな笑み。青金石の如き瞳は、底知れない程に深く蒼く、真つ向からこちらを見詰めていた。艶やかに輝く青味を帯びた白銀の髪は、その歳の幼子に似付かわしい頭巾で隠される事も無く、額の両側を申し訳程度の花飾りで飾られたのみで、帚星の如く彼女の肩口を被っていた。

ファールリユーラは時を忘れた。残された唯一の伯母姫の肖像画を目にするのは、これが二度目であった。大陸一の美姫とまで唄われた伯母姫であったが、五度目の生誕日を目前にして俗世を離れた為に、肖像画はこの一枚のみであった。

確かに似ているのかもしれないと、ファールリユーラは自身の幼かった頃の顔を思い起こしながら、目の前の幼子の顔を見詰める。しかし自分はこの年頃の頃、こんなに落ち着いた表情をしていたであろうか………？

オーヴィスの元に嫁ぎ王城に程近い今の館に暮らす様になってから、人に接する機会も独身の頃に比べると随分と増えた。王城に出掛ける度に亡き大巫女に良く似ていると、今まで幾人の人に言われたであろうか………？ 美女との誉れ高かった伯母姫に似ていると言われる事は、それまでのファールリユーラには喜ばしい事であったのだが、今のファールリユーラには喜びよりも疑問の方が勝つてしまっていた。

………クウィンディラの娘よ………

大地の精霊の言葉が脳裡に幾度も木霊し、そしてやがて消えた。

「考え過ぎなのかしら．．．．．」

ファールリユーラはふと呟いた。変に勘ぐり過ぎなのだろうか．．．

．．．。ただ単に、亡き伯母と同じ神秘の能力ちからに恵まれたから．．．

．．．？

「だからよね？ 大地の紳士方があんな事言ったのは．．．．．」

ファールリユーラは独り呟き、肩を竦めた。だが突如、叔父である

サラードル王子の驚駭した表情が甦った。あの時確かに叔父は、琥珀

色の瞳を戦きに見開きファールリユーラを凝視しながら呟いたのだ。

クウインディラ．．．と、伯母の名を．．．．．。

本人と見間違える程に似ているという事なのだろうか．．．．．

？ もやもやとした霞のかかる胸の内を持って余し、ファールリユー

ラは盛大な溜息を吐いてみた。ともすれば胸の内で形作られそうに

なる恐るべき疑問。誰に尋ねられ様か．．．？ 口にする事さえ

も憚られる事である。不敬罪に問われよう。絵の中の幼い伯母姫は

沈黙を守ったまま微笑している。

(考え過ぎだわ．．．)

ファールリユーラが首を振りながら苦笑をもらした時、突如扉が開

いた。部屋の静寂しじまを破る靴音の主に、ファールリユーラの表情は一瞬

にして綻んだ。

「お父様っ！」

嬉しさに思わず小走りに駆け出したものの、微かな違和感にはっ

とし慌てて歩を止めた。一瞬、琥珀色の瞳を見開き、次の瞬間には、

それを細めた父王．．．いや、王弟である叔父は、深みのある

低い笑い声を零した。

「すまん、お前の父では無くて、ファールリユーラよ」

「叔父上様！ いいえ、そんな．．．．．」

フアーリユーラは頬を染めながら膝を折って頭を下げる。よく見れば髪の長さも、ヒゲの形も父王とはわずかに異なる。それでも見紛う程にサラードル王子は、父王に酷似している。双子であれば何の不思議も無い事なのであるが……。

「こんな処で、独り寂しく何をしている？ 物思いにでも耽っていたのか？」

もごもごと口ごもるフアーリユーラの姿が可笑しかったのか、サラードル王子は今にも笑い出しそうな表情で尋ねた。

「伯母上様の姿絵を見ておりました」

「クウインディラののか？」

「はい。多くの方に、わたくしは伯母上様に大層似ていると言われるものですから……」

「そうか……。そうだな……」

サラードルは、幼い姉姫の姿へと目を向けながら歩を進めた。こちらを見据える紺碧の瞳が、在りし日の姉姫の瞳に重なる。死して尚、こちらの総てを見透かしている様な……、見透かされている様な……、そんな錯覚に陥りサラードルは目を背けた。

「でも、伯母上様の絵姿はこの一つしか無いのですね」

口惜し気な姪に、サラードルは頷く。

「早くに俗世を離れた故な。これが唯一のクウインディラの姿絵だ」

「残念ですこと。どれ程似ているのか、とても気になりますのに……」

心底残念そうな表情で姿絵を見詰める姪を、サラードルも又見詰める。姿だけは亡きクウインディラそのものでありながら、その醸し出される雰囲気は対照的であった。今しがた、サラードルを父と見紛い駆け寄って来た時の満面の笑顔。頬を赤らめ、慌て口ごもった表情やら、残念そうに眉を下げた表情やら、くるくると変わる生き生きとした表情。そして、唄う様に紡がれる彼女の言葉……。

「似てなどいない……」

「え？」

傍らに立つ叔父の呟きに、フアーリユーラは琥珀色の瞳を見開き振り返った。

「いや……、姿は生き写しだ……。だが、全く似てない」

叔父の瞳は、真つすぐにフアーリユーラへと向けられていながら、その実何処か遠くへと馳せられている様にも見え、フアーリユーラは返す言葉を失った。

「クウインディラは……。お前の様に生に溢れてはいなかった……。お前の様に、生き生きとした笑顔を見せた事は無かった。お前の様に唄う様に話す事も、笑い声を響かせる事も無かった。巫女たるべくして生まれた様な女だった。盲^{めい}た瞳は、現世の何物をも写さなかったにも拘らず、総てを見透かしていた……。そんな女だった……」

サラードルは手を伸ばして、姪の見事な銀の髪に触れた。

「お前は、クウインディラとは全く違う」

「叔父上様……」

「お前の方が、数十倍も人間味があつて良いという事だ、フアーリユーラ」

サラードルが低い笑い声を零した。

叔父の遠い眼差しが突如戻った様な気がし、フアーリユーラは何故か安堵する。父王にそっくりな声で笑う叔父の笑い方は、しかし、父王の輝かしい笑い顔とは異なり影を帯びていた。

若かりし頃は、アガダル王と二人、その見目良い姿と美貌から多くの女達より恋慕の眼差しを贈られたという。双子の王子達が並んで立つだけで、多くの女達は悩まし気な溜息を吐いたのだと……。以前フアーリユーラの守役を務めたシャドスが、いつだった

か語ってくれた話である。嘗て父王の小姓を務めたシャドスは、時折そんな思い出話をフアーリユーラに語ってくれたものであった。

“光の王子と影の王子” 突如その言葉がフアーリユーラの脳裏を過る。人々は嘗て、父と叔父の事を陰ながらそのように呼んでいたのだと、随分前にシャドスが洩らした事があった。だが不敬にあたるであろうから口にはいけなと言われた。

影の王子 確かに、不敬にあたるのであるうか 何故、叔父は、辺境の部族民達の地に暮らすのであるうか フアーリユーラが生まれる前から、叔父は王国を後にして遠く野蛮な土地に暮らして来た。何故 ? 此度の滞在も、年明け後の天候の安定する季節までの事。一年も滞在せずに、また遠い異国の地へと叔父は去って行くのだ。

「サラ叔父上様は、何故東の地へ赴く事を望まれたのですか？」
唐突に尋ねられたサラードルは、軽く目を見はつたが、次の瞬間には苦笑をその口元に浮かべていた。

「当時はまだ、東の地も混沌としていてな、誰かが兵を率いる必要があつたのだ。俺は思慮深い王とは違い、昔から腕っ節だけの人間だ。まあ、血が騒いだというわけだ」

低い笑いを零す叔父のどこか奥深くから、強い恐れと愛と、そして哀しみを感じた様な気がしてフアーリユーラは息を呑み込んだ。

「さあ、そろそろ王の元を尋ねてやれ、フアーリユーラよ。さもないと、お前を独り占めしたといって俺が王から責めを受ける事になるうよ」

「まあ、そんな事は」
無いとは言えずにフアーリユーラは肩を竦めた。そんな姪の様子に、叔父は苦笑を零す。

「では、サラ叔父上様、後ほどお茶を一緒に下さいます。手製の茶菓子を持参致しましたの」

「ほう？ お前の手製か？」

「はい。きつとご一緒して下さいませね。約束ですわよ、叔父上様？」

「ああ、分かった。後ほど顔を出そう」

叔父との約束を取り付けると、ファーリユーラは満足げに膝を折ると部屋を後にした。

サラードルは、姪の絹糸の如き見事な銀の髪に被われた背が扉の向こうに消えると、静かに息を吐いた。そして、姉姫の姿絵へと琥珀の瞳を廻らせた。

「あれは．．．、誠にお前の娘ではないのか？ お前と俺の．．．？ クウインディラ．．．．．？」

それは、苦悩に満ちた、消え入る如き声であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278d/>

ロセアニア物語

2010年10月8日14時05分発行